

## 詩人としての郭璞

興膳宏

京都大學

### 一 詩人ならざる郭璞

郭璞<sup>かくはく</sup>、字は景純。私たちがはるか四世紀前半、東晉草創期の人たる彼の名を記憶にとどめるのは、文選の收める「江賦」ならびに「遊仙詩」の作者としてであり、あるいは爾雅、方言、穆天子傳、山海經、子虛賦、上林賦等々の注釋者としてである。(恐らく後人の依託なのであろうが、彼の名は風水の書「葬書(經)」の撰者としても知られている。)晉書郭璞傳の記述にしたがえば、これらの注釋は數十萬言に及び、また作るところの詩賦誄頌は數萬言と稱される。もちろん現在に到るまで保存された彼の業績、とりわけ詩文の類は決して多いとはいえず、恐らく「數萬言」の數分の一

詩人としての郭璞(興膳)

にすぎまい。郭璞の文學を窺うには、私たちはごく貧しい資料しか與えられていない。しかし文學の世界には、作品は乏しくとも、あるいはむしろ乏しいがゆえに、闇の中から放つ神秘的な光芒を強く讀者の腦裏に焼きつけずにはおかぬ詩人たちがいる。數首の「遊仙詩」の存在は、郭璞をそのような詩人の系列に加える資格を主張するように思われる。

史書は彼の文學上の業績に言及して、「詞賦の冠と爲す」(晉書郭璞傳)、あるいは「江左の風味、道家の言を盛んにす。郭璞は其の靈變を學ぐ」(南齊書文學傳)と讚辭を送り、さらに文學批評の專著としては劉勰の文心雕龍に、「江左の篇製、玄風に溺る。徇務の志を嗤<sup>わら</sup>笑<sup>は</sup>い、亡機の談を崇<sup>と</sup>盛<sup>う</sup>ぶ。(中略)景純の仙篇の挺拔して俊と爲す所以なり」(明詩篇)、「景純の豔逸、中興に冠するに足る。郊賦(南郊賦)既に穆穆として觀を大いにし、仙詩亦た飄飄として雲を凌<sup>あ</sup>げり」(才略篇)、鍾嶸の詩品に、「始めて永嘉平淡の體を變じ、中興第一と稱せらる」(中品)という評價がそれぞれ見えている。いずれにせよ、郭璞の文學が文學的虚談に

低迷する東晉文學界の中で、ひときわ抜きん出た存在だつたことを指摘している點で、これらの評價は一致しており、また現代中國の批評基準に照してみても、陸機・潘岳・左思らによつて代表される西晉文學から、四世紀末陶淵明が出現するまでの時期において、郭璞は劉琨とともに、望見できる數少い高山の一つに目されている。

しかし、もし私たちがここで郭璞はもつばら詩人として、あるいは古典の注釋家としての業績によつて歴史の記憶にとどまつてきたと結論を下すなら、恐らくは輕卒な誤解を犯すことになるだろう。なぜなら、史書は彼を正統的な文人や學者としてではなく、むしろ異端の才能、神祕的な技能を持つた人——占筮者——として印象づけようとするからである。晉書によれば、彼は郭公なる人物に従つて、五行天文卜筮の術に通曉し、攘災轉禍の妙術は世にならびなく、高名な前代の占筮者漢の京房、三國の管輅かんくわすらをもしのぐ手腕だつたという。そして晉書本傳が、史實としてはおよそ信ずべからざる鬼話の集積であるのをはじめとして、晉書の隨所に散見する郭璞の事蹟は、すべて彼の術者とし

ての才幹を示すものである。その他志怪の書「搜神記」、「世說新語術解篇」、さらにはこれらの話を傳承する説話「東晉演義」、王世貞の編に擬せられる「列仙全傳」等に登場するのも、すべて占筮者としての郭璞にはかならぬ。ルネサンス期フランスの占星術者ノストラダムスは十六世紀にしてすでにフランス革命を豫言したとの評判があるが、郭璞は筮の中興を豫言したことはおろか、自らの死後五十年後の桓温の亂や、百年後の東晉の終焉までも見通していたと傳えられる<sup>①</sup>。いま本傳から、術者としての面目を示す一つの説話を引くことにしよう。

西晉末、北方蠻族の侵入を東南の地に逃れようとした郭璞は、一日、將軍趙固を頼つて邸にやつてきた。たまたま趙固の愛馬が死に、彼は悲しみのあまり、部屋に閉じこもつたまま來客にも會おうとしない。だから郭璞がやつてきたときも門番はいつかな取りついでくれぬ。そこで璞が「私が生き返らせましょう。」というとき、門番はびつくり仰天して取りつぐし、主人もあたふたと出てきて尋ねた。「わが馬を生き返らせるといふのか。」璞答えて、「若い

衆二三十人におのおの竹竿を持たせて東の方へおやりなさ  
い。三十里も行くと林の中に社廟（ほくら）がありますから、竿でガ  
ンガン叩きまわること。すると何やらとび出してくるはず  
ですから、そいつを捕えてすぐ引き返してきて下さい。そ  
うすればこの馬は生き返りますよ。」趙固がいわれた通り  
下男どもをやると、果して（さ）猴（さ）に似た獸が捕えられた。さつ  
そく持ち歸ると、この獸、馬が倒れているのを見るや、そ  
の鼻に口をつけて息を吹き込む。ややつて、馬はむつく  
り起き上り、はねまわつたり、いなないたり、餌も平素の  
通り食べる。さつきの獸はすで見えなかつた。趙固はか  
たじけなく思い、郭璞に厚く禮物を送つて恩義に報いた。  
この話はまた太平廣記卷四百三十五に「搜神記に出ず」  
として見え、現在の二十卷本搜神記では卷三に同じ話が見  
えている。晉書の傳はまず卷頭にこの話を据えた後、郭璞  
が江を渡り、卜筮の術を愛でられて、管中興の重臣王導の  
參軍となるまでのエピソードを順を追つて記載している。  
今は煩を避けて、その梗概のみを記すことにする。

○廬江（安徽省）に至つた郭璞は、太守胡孟康の婢に心

詩人としての郭璞（興膳）

を奪われ、小豆三斗を赤衣の人数干に變える幻術を使つて、  
まんまと女をかすめとる。（同じ話が搜神記卷三にある。）

○江を渡つて、宣城太守殷祐の參軍となる。水牛ほども  
ある怪獸の出現について占い、これが「驢鼠」というもの  
であると判ずる。（同じ話が搜神記卷四にある。）

○石頭督護となつた殷祐と行をともし、延陵にあらわ  
れた鬪鼠、無錫に生じた妖樹から、逆賊の出現を豫言する。  
（同じ話が宋書、晉書の五行志、および搜神記卷七にある。但し  
五行志は鬪鼠を鼯鼠に作る。）

○王導に認められて參軍となる。王導に震厄のあること  
を豫見し、柏の木を身代わりにして難を逃れさせる。（同  
じ話が世説新語術解篇にある。）

いずれの逸話も、史實としての信憑性の立場からすれば、  
ほとんどとるに足りぬものばかりである。搜神記に見える  
ような怪異譚が正史の記述の中に存在すること自體に、讀  
者は奇異な印象を抱かれまいであらうか。

ではこうしたいわば荒唐無稽な説話は、郭璞という一人  
の詩人について考察を進めてゆく上で、一點のかえりみる

價値なきものとして抹殺すべきかといへば、私にはそうとばかりも言いきれぬものがある。これらの説話が正史に採擇されたという事實の背後に、郭璞の生涯を包む世界の空氣が搖曳するのを感じるからであり、また歴史家が史實に對するときの眼、やや大膽なことを使えば、史觀といつたものすらそこに介在してくるよう思ふからである。

晉書という史書において特徴的なことは、篇々に垣間見られる五行志的世界觀の存在である。五行志は漢書以後隋書に至るいくつかの正史に設けられ、五行の運行が人事の得失の徴をなすという觀念にもとづいて、自然界の休徴および咎徴と、それに應じて起つた人事の變とを記載する。當然のことながら、そこには宋代以後の合理主義的立場からはかえりみられそうにもない異常怪奇な事件が羅列されている。例えば郭璞が無錫の妖樹、延陵の蟬風から逆賊出現の徴を看破した前述の話はその顯著なあらわれの一つといえる。さらに細かな點に目を注ぐと、五行志の中には捜神記の撰者干寶の言として引かれる話の多いのに氣づく。これは初唐の晉書編纂者たちが資料として干寶の著書を利

用したことを意味するが、あるいはそれは原捜神記からの採用であつたのかもしれない<sup>②</sup>。この推論には二つの裏づけが考えられる。第一に干寶はまた西晉の歴史を記した晉紀二十三卷の著者であり、文心雕龍史傳篇が「干寶の述紀、審正を以て序を得」とその見識を讃えるほか、晉書・懷帝愍帝紀の史官評に彼の晉紀總論が全文引用されているなど、史家としての彼の言語は相當に重んじられているからである。(なお晉紀總論は文選にも收められている。) 第二に六朝人の歴史意識では、捜神記のような志怪の書も廣い意味では史書の範疇に包括され得るものだつたように推測できるからである。因みに隋書經籍志が、捜神記を史部の雜傳に分類し、この類の「虚誕怪妄の説」を雜える書も、「其の本源を推せば、蓋し亦た史官の末事なり」ということを考えあわせるがよからう。この推測を助ける一つの資料が晉書干寶傳に見出されるのはいささか皮肉である。傳によれば、彼の父が死んだとき、その愛妾が彼の母から無法にも生き埋めにされたが、十數年後母が亡くなつたとき墓を開くと、棺の中からその女が昔と寸分違わぬ容姿で生きて現われ、

干寶は彼女を嫁にやつたという。これは世説新語排調篇注の引く「孔氏志怪」の文から採用された逸話である。郭璞の同時代人らしい面目を感じると同時に（郭璞は彼の友人だった）、志怪の記述がそのまま正史に移し傳えられていることに、やはり一つの意味を見抜いておかねばならぬ。

晉書における五行志的世界觀のいつそう顯著ならわれは藝術傳中の方術者たちの傳記である。（後漢書では方術傳、三國志では方技傳がそれにあたる。）藝術傳の前半は、天文、算曆、陰陽、占候等のいわゆる祕學にたけた人物の傳であるが、ここにも郭璞の傳記を考察する上にかえりみるべき所が少くない。中でも私の注意を引くのは、郭璞のいわばパトロンともいうべき立場にあつた丞相王導をめぐる方術者たちの話である。王導、字は茂弘、は琅邪の名族王氏一門の一人であり、琅邪王時代の元帝に厚い知遇を得、のち元帝の片腕となつて晉の中興をなしたとげた人物である。藝術傳中の一章、陳訓の傳によると、あるとき王導が病いがちなわが身を案じて陳訓に相談をもちかけたところ、訓は彼の耳が長く肩まで垂れているのを吉相と判じて、必ずや

詩人としての郭璞（興膳）

壽久しく、位階は貴顯を極め、子孫は江東の地に榮えるであろうと豫言したといい、また戴洋の傳には、王導に轉居をすすめて病いを癒やしてやつた話が見える。郭璞が王導の震厄を救つた話はすでに紹介したが、彼にはまた王氏一族の繁衍を豫言したという話柄もある<sup>⑨</sup>。王導はいうまでもなく江左の管仲といわれた名臣であり、東晉きつての大立者であるが、史書によれば彼には方術者との交渉が多く、彼の周邊には何か呪術的な雰圍氣すらただよつていようである。例えば次の話などはその傾向を極めて顯著に示すものといえるであろう。王導の早世した長子悦、字は長豫の傳に見える逸話であり、話は悦の死の直前からはじまる。

「是より先、導の夢に、人百萬錢を以て悦を買い、潜かに祈禱者の爲に備う。（導は）尋ねて地を掘り、錢百萬を得。意甚だ之を惡み、一に皆藏閉す。悦の疾い篤きに及びて、導は憂念特に至り、食わざること積日、忽ち一人を見る。形狀甚だ偉、甲を被て刀を持つ。導問う、『君は是れ何人ぞや』と。曰く、『僕は是れ將侯なり。公の兒佳からず、爲に命を請わんと欲す。故に來りしのみ。公また憂う

なかれ』と。因りて食を求め、遂に數升を噉う。食い畢るに、勃然として導に謂いて曰く、『中書の思は救うべき者にあらず』と。言い訖りて見えず。悦亦た殞絶れぬ。」

(太平廣記卷百四十一には出世説新書としてこの話が見えている。)

斷わつておくが、私はなにもこの奇譚を事實と見なしてあつかおうとするのではない。話の経緯そのものは要するに一つの説話として聞きすごしておくほどのものに過ぎぬ。しかし説話が生まれるに際しては、それを生み出すだけの

社會的な母胎が不可缺であり、ある人物に關する説話が傳わるには、その人物の人格、あるいは社會が彼について受けとめた印象といった要因がさらに必要となつてくる。史書がそうした説話誕生の因果關係を逆用して、つまり一つの説話を利用して人物の性格づけをおこなおうとすれば、資料を選択する歴史家の見識がさらなる一つの要因となつて介在してくることも當然である。E・H・カーが「ある社會がどういふ歴史を書くか、どういふ歴史を書かないかということほど、その社會の性格を意味深く暗示するものはありません。」(清水幾太郎譯「歴史とは何か」といふよう

な意味において、王導をめぐる方術者たちの話も評價すべきではないだろうか。王導についてのそうした説話を生むに足る要因が當時の社會に、また王導自身に備わつていたことは確實であろう。祈禱者をやとつて病氣平癒の術をおこなわせるといふことは、恐らく當時一般の實態だつたのであろうし、前述のいくつかの話柄を併せ考えてみれば、王導が常々郭璞らの術者を身邊に近づけていたことも多分事實だつたのであろう。王導のこうした一面は、清濁あわせ飲む磊落な、しかし峻嚴さに缺けるところの多い、いかにも東晉という時代の子らしい面目を窺わせるのではないだろうか。郭璞に關する非合理的説話も、非合理性のゆえに一笑に付すべきではなく、それらが事實として定着され、人々の腦裏に郭璞のイメージを規制した背景をこそ私たちは注意深く見ておく必要があるだろう。

さらにつけ加えておくならば、王導と並ぶ中興の重臣であり、郭璞とは「布衣の好み」のあつたといわれる庾亮にも方術者との交渉を傳える説話があり(晉書藝術傳の戴洋傳および吳猛傳)、郭璞が渡江後最初に身を託した殷祐にも同

趣の話が傳えられている（藝術傳の韓友傳）。占筮者としての郭璞が庾亮、殷祐らと近い接觸をもつに至つた背景をいくばくか理解できるようである。

郭璞の生きた東晉の社會において、かかる方術者流が巷に氾濫して、それに伴う弊害も無視できぬ段階にまで至つていたことは、次に引く抱朴子道意篇の一節からも推察できる。

「俗の謂う所は率ね皆妖僞にして、轉た相い誑し惑わし、久しくして彌よ甚だし。既に病いを療やす術を修むる能わず、また其の大迷を返す能わず、藥石の救いには務めずして、惟だ祝祭の謬ちを専らにす。祈禱して已むこと无く、卜に問うて倦まず。巫祝の小人は妄りに禍い崇りを説き、疾病の危急なるは唯だ聞かざる所、聞けば輒ち修爲して、損費警られず。富室は其の財儲を盡くし、貧人は倍の息を假擧る。田宅は割り裂きて以て盡くるに至り、篋櫃は倒装にするも餘す無し。或いは偶ま自ずと差ゆるもの有れば、便わち神の賜を受くと謂い、如し其れ死亡すれば、便わち鬼に赦されずと謂う。幸いにして誤り活くとも、財産

詩人としての郭璞（興膳）

は窮まり罄き、遂に復た飢寒凍餓で死す。或るものは起ちて刳剝を爲し、或るものは穿窬して斯わち濫る。身を鋒鏑の端に喪い、自ら醜惡の刑に陥る。皆此のまじないの由なり。或いは什物は祭祀の耗費に盡き、穀帛は貪濁の師巫に淪む。既に没するの日には、また凶器の直、衣衾の周すら無く、尸をして朽ちしめ、蟲をして流れしむるは、良に悼むべきなり。愚民の蔽、乃わち此に至れるかな。」

かかる祈禱を神仙の術にとり入れて新しい宗教を作つたのが後漢の張陵の五斗米道であり、抱朴子の著者葛洪は、祈禱の性質そのものよりも、むしろこれらの巫術が俗化して社會勢力をなすに至つたことに反撥しているのだとは岡崎文夫博士の主張である。（「魏晉南北朝通史」、弘文堂一九三二年）それはともかく、郭璞の生きたのは、巫術がこのように社會生活の中に深く浸透していた時代であつたことを確認しておかねばなるまい。

しかし郭璞の技倆をこうした「巫祝の小人」と同一視することはむろん妥當でない。いやむしろ彼は妖術者の輩出を苦々しい思いで見つめていたであろう。元帝治世の末年

(三二二、二年ころ)、任谷なる道術者が宮中に入つて帝の側近く伺候するという不祥事がおこつた。彼は蛇を生み落して宦者になつたといわれる怪人物である。郭璞はこの事態を憂慮して自ら上疏をしたためた。怪異をおこなう術者への露わな憎悪が、激しく行間に叩きつけられている。

「陛下若し谷を以て信に神靈の憑る所の者と爲さば、應に敬して之を遠ざくべし。夫れ神は聰明正直にして、接するに人事を以てすればなり、若し谷を以て妖蠱詐妄の者と爲さば、當に裔土に投畀すべし。宜しく紫闈に褻近せしむべからず。若し谷を以て或いは神祇の譴を告げ、國の爲に咎を作す者とせば、當に克己して禮を修め、以て其の妖を弭むべし。宜しく谷をして安然自容として其の邪變を肆まにせしむべからざるなり。」

靈異に通ずる自らの才技を信ずるがゆえに、まやかしものへの糾弾は峻嚴を極める。彼は卜筮の術によつて王導ら大官の寵を受けたということからも推測できるように、その占筮は常に政治の舞台の上で、國家・社會の命運という視野の中で行われたようであり、またそれが彼を重用した

人々の要請でもあつたに違ひないのである。郭璞の上疏が常に對社會的な姿勢を保ち、世の變事を直視して、そこから豫想される未來のより深刻な變事を警告するという立場を貫ぬいているのも、彼の據つて立つ政治的基盤を無視しては考えられないであろう。晉書本傳は他になお三つの上疏を收めているが、その内容はいずれも時の過酷な刑罰に對する憂慮である。

大興四年(三二二)の省刑疏によれば、太白が月を蝕する天文上の異變、前年秋以來の長雨、すべて度を失した刑罰に對する警告であるとして、彼は國家の未來に豫想される不祥の事態におののく。「また過ぐる建興四年(三二六)行丞相令史淳于伯が刑に處せられたとき、その血はほとばしり出て處刑臺の柱を逆流しました。冤罪をこうむつたとはいえ、一小人の死がなぜこれほどまでに天地の靈氣を感じしめてかかる怪事を現出するに至つたのでしょうか。陛下よくよく御思慮あつて天の咎めに對處なされますよう。」このような論旨からはじまる上疏は、時としてぶしつけの氣味すらあるが、それだけの強い口吻を禁じ得なかつたの

は、やはり先の見えすぎる人間としての恐懼があつたからだろう。しかしこの危機感を靈異に通ずる彼の特殊な才能からのみ生まれたものとしてはなるまい。江南の地に偏安を得た中興王朝にはもはや中原回復の力はなく、王導、庾亮らの中軸とする貴族政治の内部では、すでに王敦が叛亂の志をあらわにしており、「風俗は淫僻にして、恥尚は所を失う」（干寶晉紀總論）といわれた西晉時代の空氣のみが依然として淀んでいる社會、そうした環境を身近かに意識すればするだけ、天文・五行の異變が彼をさらに深い不安に驅りたてていつたのであろう。

「頃者さきごろ以來、役賦轉た重く、獄犴は日びに結ばる。百姓は困擾して、亂に甘んずる者多く、小人は愚峻にして、共に相い扇惑す。勢の至る所無しといえども、然れども虞おもんばからざるべからず。」（皇孫生上疏）

郭璞の占筮はすくなくともこれだけの現實認識を踏まえていたことを確認しておかねばならぬ。そしてまたこのところ、彼を凡百の方術者流から分つ大きなモメントとなるのである。

詩人としての郭璞（輿膳）

## 二 流浪と習作の時代

郭璞は河東聞喜の出身であり、父の郭瑗は尚書都令史（九品中正法では八・九品にあたる。）の賤職から建平太守に拔擢された人物である。宮崎市定博士はこの間の事情について、「都令史という職から考えて、これは庶民から成上つた者かと思われる。」（九品官人法の研究、京大東洋史研究会一九五六年）と推察される。さらに博士によれば、「こういう一代で成上つた者の子も寒士」であつた。寒門の子郭璞に向けられた世間の嘲笑と彼の述懐は、後に引く自嘲の文章「客傲」に見えている。郭璞自身は宣城太守殷祐の參軍つまり祕書となり、丞相王導の參軍を経て、中興王朝の著作佐郎に起用され、のち尚書郎に遷り、死後弘農太守を贈られた。また彼の子鶯の最終官位は臨賀太守であつた。門閥制度の嚴格な當時にあつて、彼の家は父以來太守までの地位しか約束されていない家柄であつた。祖父以前の家系について史書が何も語っていないのは、やはり元來由緒ある名門ではなかつたからであらう。

彼が生まれたのは晉の武帝の咸寧二年（二七六）であり、西晉の代表的詩人潘岳よりは二十九歳の年下、さらに陸機よりは十五歳、劉琨よりは六歳の年下、彼の仕えた王導とは奇しくも同年である。

彼の生後四年目の太康元年（二八〇）、三國の中でわずかに命脈を保つていた呉が滅び、後漢の滅亡以來、ここにはじめて中國全土が晉の翼下に統一された。半世紀になんなんとする三國の戦亂の後によりやく訪れた平和は、しかしつかの間に潰え去つた。統一後の十年間、平穩な武帝治世の時代にも、亡國の芽はすでに萌しはじめていたのである。外戚楊氏一門の専横、爲政者たる貴族の道徳的頹廢、度重なる天災と饑饉——大帝國の土臺は次第にむしばまれていつた。武帝の死後、暗愚な天子惠帝が即位すると、禍根はさらにひろがる。外戚楊氏没落後新たに權力の座についたのは賈皇后とその一門であり、ほしいままにめぐらす彼女の策謀の及ぶところ、數多くの王族權臣たちが權勢を失墜してはあいついで殺戮されてゆくさまは、さながら一種の恐怖政治を現出している。賈氏一門の實力者賈誼（賈皇后

の甥）をとりまいて、石崇、歐陽建、潘岳、陸機、陸雲、左思、劉琨らの二十四友が文章の彩を競つたのもこのころである。

だが賈氏にも没落の日が來た。永康元年（三〇〇）趙王倫の擧兵に端を發する八王の亂は、單なる賈氏誅滅にとどまらず、以後數年間にわたつて中國全土をめぐりしく變轉する争亂の渦中に巻きこんだ。惠帝が東海王越に毒殺された光熙元年（三〇六）までの六年間に、六度も年號が改められ、西曆三〇四年のごときは、永安、建武、永安、永興と實に四度までも改元されていること、この間皇后羊氏は四度も廢立をくり返されていることを思えば、騒亂の激しさが想像できよう。またこの亂によつて、張華、石崇、潘岳、歐陽建、陸機、陸雲ら多くの文人が非命の死をとげ、事實上西晉文學は渡江より十年早くここに終焉を告げたことも記憶されねばならぬだろう。

このころになると、積年の内亂と天災のため疲弊しきつた中國に、さらに新たな脅威、北方蠻族の侵略が加わつた。匈奴の大單于劉淵は永安元年（三〇四年）、山西の左國城に

都して漢王を稱し、次第に南下して勢いを増していつた。

そして永嘉五年(三一二)には、ついに劉淵の子劉聰によつて首都洛陽も陥落し、時の皇帝懷帝は賊の手で幽閉された。同じく亂世とはいいながら、三國の争亂がなお漢族間の争いであるのに對して、永嘉の亂は異民族間の抗争であり、中原を追われた漢民族にとつては、かつての歴史に類を見ない屈辱の経験であつた。永嘉七年(三一三)、劉聰が宮中に酒宴を張つたとき、懷帝は青衣を着せられて酒の酌を命ぜられた。異民族の冷酷な侮蔑感がここにはあり、かつて明の滅亡に際會した顧炎武は、生々しい實感をこめてこの一事を日知録に記した。(日知録卷十三)

さてこの動亂期を郭璞はいかに生きたのであろうか。彼の故里山西の聞喜は前線に近いだけに、かなり早くから匈奴侵略の脅威にさらされていたことが想像できる。詩人として著名な劉琨は、形勢不利な晉軍にあつて終始最前線で孤軍奮闘した將軍であるが、彼が永嘉元年(三〇七)山西の并州刺史となつて任地に赴く途次上つた表によれば、侵略を蒙つた土地の民は流移四散して十に二も存せず、老

詩人としての郭璞(興膳)

人子供をかかえた流民は路にひきもきらず、生き残つた者も家族とは生き別れ、死者はかえりみる人としてなく、野原には白骨がうす高くさらされているという悲惨なありさまであつた。郭璞は鋭敏な豫言者の目をもつて、いち早く故里の侵略と西晉の滅亡を見通していた。

「惠(帝)懷(帝)の際、河北先ず擾る。璞これを箠し、策を投じて嘆じて曰く、『嗟呼、黔黎はまさに異類に溷びんとす。桑梓は其れ翦られて龍荒と爲らんか』と。是において潜かに姻昵を結び、交遊數十家に及ぶ。」(晉書郭璞傳)

潜かに姻昵を結んだのは、南渡する豪族に身を託して難を逃れようとしてのことであらう。前述した趙固の馬の話などは「交遊」を求める彼の口をうまく描いているが、意地悪くみれば、郭璞は機に乗ずることの巧みなオポチュニストとしての一面をもつていたのではないか。もつとも、彼のような寒門の士にとつては、才能をいかにうまくチャンスに乗せるかということが處世の要諦であつたには違いないけれども。彼はやがて故里を去つて、江南の地へ旅だつ。その間のエピソードのいくつかはすでに紹介したが、

故郷を捨てたる彼の心境をもつとも適切に描きえているのは恐らく次の逸話であろう。皮肉にもこの話は彼の傳ではなく、藝術傳中の匈奴の占筮者卜珣の傳に見えている。

「卜珣、字は子玉、匈奴後部の人なり。少きより好んで易を讀む。郭璞見て歎じて曰く、『吾の如かざる所なり。奈何ぞ兵厄を免れざる』と。珣曰く、『然り。吾が大厄は四十一に在り。位は卿將と爲るも、當に禍いを受くべきのみ。爾らざれば亦た猛獸の害する所と爲らん。吾亦た未だ子の終りを令くするを見ざるなり』と。璞曰く、『吾が禍いは江南に在り。甚だ之を營むも、未だ免るる兆を見ず。然りといえども、南に在らばなお期を延ばすべし。此に住まりては時月を過ぎず』と。珣曰く、『子公吏と爲る勿ければ、以て諸を免るべきか』と。璞曰く、『吾の公吏を免るる能わざるは、なお子の卿將を免るる能わざるが如きなり』と。珣曰く、『吾は此に帝王有りといえども、子は終りに復た二京を奉ぜざらん。琅邪（後の元帝となつた琅邪王司馬睿のこと）奉ずべし。卿謹しみて之を奉ぜよ。晉祀を主る人は必らず此の人ならん』と。珣ついに龍門山に隠

る。」

二人の豫言者は淡々と互いの運命を卜しあつた。卜珣の豫言として見える晉の中興を郭璞も信じて、南へ旅だつ意を固めたのであろう。だが江南が終生の安寧の地ではありえないこともすでに彼の確信の中にあつた。江南の地に己れを待つ禍いの潜むこと、生涯公吏たるを免れず、それが命とりとなること——自己の運命に關する二つの豫言はいずれも不幸にして適中した。その詳細は後に委ねるとして、彼の豫言には、自己の立場と性格を計算しつくした運命論的諦感が漂つていようである。

宋書、晉書の五行志にはすでに見たように、永嘉五年（三一）延陵（江蘇省）にあらわれた蠶鼠を郭璞が卜したという話があり、この年時を一應認めることにすれば、洛陽が匈奴の手におちるころ、彼は江の流域近くまで到達していたことになる。

私たちはもうそろそろ詩人としての郭璞について語るべき段階に來たようである。現存する彼の作品のうち、遊仙詩を中心とする詩はその多くが渡江後の作に係ると推定で

きるだけで、明確な制作年代は定めがたいが、賦については、明らかに江南での作品と断定できる江賦、南郊賦を除き、北方における初期の習作的作品を数篇指摘することができる。推定の據り所となるのは文中の地名であるが、該当する作品は、巫咸山賦（巫咸山は山西省夏縣にある山）、鹽池賦（鹽池はたぶん山西の解池のことであろう）、流寓賦、登百尺樓賦の四篇である。これらはいずれも藝文類聚等の類書に見えるもので、多くは斷片をとどめるにすぎず、文學的價値を云々することはもちろんできないが、初期の作風の一面を窺う意味ではやはり見逃せぬ資料である。

一連の初期の作品をながめてみると、遊仙詩や江賦に代表される成熟期の郭璞文學に顯著な、常識的でないもの、異常なものへの關心がすでに特徴となつてあらわれていることに氣がつく。巫咸山賦（藝文類聚卷七引）にいう巫咸山とは、太古の帝堯の侍醫巫咸が業を修めた山といい、命名の由來からすでに尋常でないが、楚辭にも巫咸なる神巫の名が見え、いかにも郭璞が興味を示しそうな對象である。なおこの山の名は山海經にも見えている。また鹽池賦（藝

詩人としての郭璞（興膳）

文類聚卷九、北堂書鈔卷百四十六引）の解池は、山海經北山經の景山の條に「南のかた鹽販の澤を望む」といわれる鹽水湖がそれであり、賦の題材そのものとしてまことに奇異といわねばならぬ。文中「嗟玄液の潛み潤える、羌其の生ずる所を知る莫し」の條は鹽池に對する彼の興味のある方を端的に示している。すなわち、郭璞は眼前に存在する對象の深奥に、常識をもつて測ることのできぬ神祕な生命を認め、その不可思議さに己れの全感動を注ぎこもうとしているのである。またこの時期の作品かどうかは不明だが、井賦（藝文類聚卷九、初學記卷七等引）では汲めども盡きぬ水の神祕に言及して、「之を挹めども損ぜず、之を停むれども溢れず。其の源を察する莫く、動きて愈よ出ず」といい、蜜蜂賦（北堂書鈔卷百四十七、藝文類聚卷九十七等引）では蜂の體內で蜜の生成される不思議さを、「華滋を咀嚼して、釀して以て蜜と爲す。自然の靈化は、其の術を識る莫し」という。いずれも同じ趣向の句といふべきであろう。後に改めて説くはずであるが、この神祕な對象への關心をめぐるとな詞藻に包んで開花させたのが後年の江賦であり、遊仙

詩である。

郭璞の賦は、詠物の賦がその大部分を占めるが、初期の作品には數少ない抒情の賦が混つてゐる。その一つ流寓賦（藝文類聚卷二十七引）は北方の各地をさすらう苦難の旅を描いた作品であるが、文中「嗟城池の固ならず、何ぞ人物の希少なる」の二句が亡國の豫感を内包するとすれば、この旅はあるいは南遷の第一歩だつたのかもしれない。

「南山の高嶺を越え、焦丘の微路を修む。斯の道の峻絶せるに駭き、王陽に感じて懼れを増す。詰朝解池を發し、辰中河北に覽ぶ。此の縣の舊名を思うに、蓋し曩日の魏國なり。詩人の流歌を詠すれば、信に風土の儉刻なる。茲の邑の廻逝せるを背にすれば、何ぞ險難の多く歴る。陝城を南の涯に望めば、號氏の疆場を存す。實に我が姓の出でし攸にして、逸として乃の迹を懷う有り。」

以下數句も同様の展開のしかたで、険しい道程とそこに點綴される古代回顧のくり返しによつて賦は構成される。

この賦にあらわれる地名のひとつひとつに、郭璞は亡命者の悲哀と限りない愛着を託しながら去つていつたのである

う。もう一つの抒情の賦「登百尺樓賦」（藝文類聚卷六十三引）では、故里の山河に深い親近感を寄せつつも、亡國の豫感に凜然としておののく郭璞の姿が觀取できる。

「青陽の季の月に在つて、百尺に登つて以て高く觀る。斯の遊びの娛しむべきを嘉するも、乃わち老氏の歎ずる所なり。凌き檻を撫して遙かに想い、乃わち目を極めて肆まに運らす。情は眇然として以て遠きを思い、悵として自失して惛みを潛む。」

高樓の上から果てしなく廣がる視野、それは人をおのずと遙かな思いに驅りたててゆく。あるときは曹植の登臺賦のごとく崇高の思いを致し、あるときは孫楚の登樓賦のごとく歡樂の情を満たし、またあるときは王粲の登樓賦のごとく故郷への思慕を誘發する。いま郭璞の眼前に展開する故里の自然は、心の安らぎを託すべき場所として映じたかのようにあり、具體的にはこの地の諸山に隠れた隱遁者への讚美となつて表現される。

「禹臺の隆く巔つを瞻め、巫咸の孤り峙ゆるを奇とす。鹽池の滉汗たるを美とし、紫氛を察すれば霞の起る。異な

るかな傳巖の幽人、神なるかな介山の伯子。首陽の二老に揖し、鬼谷の隱士を招く。」

しかしやがて神人の姿は消えて現實にかえれば、この自然のほど遠からぬ地域で、匈奴のほしいままな蹂躪のままにじりじりと後退を餘儀なくされる國軍の劣勢があり、このときふと心をかすめるのは亡國の不吉な豫感である。

「嗟王室の蠹蝨たる、方に怨みを構えて武を極む。神器の遷浪するを哀しみ、綏旒を指して主に譬う。雄戟は廊技に列なり、戎馬は講柱に鳴く。苜華に瘡つて怪を増し、飛駟の戸を過ぐるを歎ず。茲の樓に陟つて以て曠かに眺むれば、情は慨爾として古を懷う。」

「綏旒」は旗の下につけられる飾りであるが、勝手にとりはずしのできる微弱な存在にすぎぬところから、名のみあつて實の伴わぬ傀儡君主を意味する。八王の亂以後の王室の微力さはまさにその通りであつたにちがいない。また「苜華」とは小雅の「苜之華」のイメージの發展であり、毛詩の序によれば、周の幽王の世、領土を犯す夷狄を討伐するため多くの軍旅が發せられ、その負擔のために民力は

詩人としての郭璞（興膳）

疲弊し、やがて饑饉が國內を襲つた。周の一大夫が王室のまさに亡びんとするを憂え、亡國に遭遇した自らの不幸を傷んでこの詩を作つたという。これもそのまま郭璞の賦の感傷と重なるであろう。人は郭璞の詩賦の華麗な辭句をたえる。しかし後の遊仙詩の諸篇が單なる「列仙の趣き」ではなく、現實への不満を託した詠懷の作であるといわれるように、彼の發想は常に透徹した現實認識を踏まえていることを見逃してはならない。彼の現實認識が對社會的に顯現されたものとしては數篇の上疏があり、その意義については前章で觸れておいた。玄理の埒外へ一步も出ようとしない孫綽らの玄言詩人とは、まさにこの點で彼は質を異にしている。因みに世說新語品藻篇によれば、孫綽は現實との接觸を避けることをむしろ誇りとさえしていたという。④ 怪異への關心と現實認識という郭璞文學の二つの發想の基盤は、彼が詩人として一家をなす以前の、三十歳をいくらかも出ないころの作品からすでに一貫していたことを確認しておくべきであろう。

彼の現實認識を示す初期の作品として、今度は詩の中か

ら答買九州愁詩の第二首を見ることにしよう。

顧瞻中宇 中宇を顧瞻するに

一朝分崩 一朝にして分崩す

天網既紊 天網 既に紊れ

浮鯢橫騰 浮鯢 横まに騰る

運首北眷 首を運らして北を眷れば

逸哉華恆 逸かなるかな華恆

雖欲凌翥 翥を凌せんと欲すといえども

矯翮靡登 矯げし翮は登ること靡し

俯懼潛機 俯しては潛機を懼れ

仰慮飛晉 仰いでは飛晉を慮れ

惟其嶮哀 惟れ其れ嶮哀なる

難辛備曾 難辛 備に曾なる

庶晞河清 河清を庶晞うも

混焉未澄 混として未だ澄まず

詩を贈られた賈九州がいかなる人物かは穿鑿する術もな

いが、詩の内容から判断して、郭璞の南遷後なお日淺く、

國內の混亂がいまだ收束を見ぬ時期の作に係ることは分明

である。この連作の第三首には「我の徂き遷りて自り、之を周りて陽月なり。亂離方に歎き、憂虞歎まず」の句があり、上の推測を裏づける。恐らくは郭璞が北方の地を去つてから一年を経た永嘉三・四年、晉朝のいしづえがいよいよ音をたてて崩壊しはじめたころの感慨であろう。

以上数少ない作品ではあるが、その中には郭璞文學の萌芽を示すいくつかの特徴が見出されることを私は指摘したつもりである。だがこの時期のすべての特質がそのまま彼の後半生に移行して、成長していつたというのではない。これはあくまで前記の制作期を確認できる作品についてのみいえる管見であるが、後の江賦や遊仙詩の特色である目くるめくまでの華麗さ、繁縟さは、初期の詩賦の顯著な特色となるには至つていないように思われる。初期の賦に描かれる自然は美々しく粉飾を施した景觀とはならず、心を傷ましめる陰鬱な存在としてある。また社會あるいは自己に對する省察は、後の作品ほどの屈曲した複雑な形象を経ることなく、より直截な形をとつて表出されてくるようであり、私たちはかなり明確に社會の不安と、詩人の苦惱を聞

きとることができる。この現象は郭璞の詩人としての成長の問題といくばくかかわりをもつであらう。しかしそれ以前の問題として、彼の後半生がともかくも秩序の安定した社會にあつたのに對して、その前半生は寸分の豫斷も許されぬ動亂の社會にあつたという環境の相違も見落してはならぬだらう。

### 三 江 賦

江を渡つた郭璞が占筮者として、また詩人として名聲を驅せるに到つたのは、一に丞相王導の參軍となつたことにはじまる。孫綽の丞相王導碑（藝文類聚卷四十五引）に、「心を夷らかにして以て白屋の士を延き、己れを虚しくして以て巖穴の俊を招く」といわれるように、王導はことに有能な寒門の子弟を發掘することに意を用いたが、彼に登用された人材の中には、搜神記の著者干寶や抱朴子の著者葛洪も含まれていた。郭璞は卜筮の術を愛でられて王導の參軍となつたが、時あたかも東晉の草創期、彼は新たな王者の正當性を裏づける銅鐸その他が各地の土中から出現すると

詩人としての郭璞（興膳）

豫言して、事實その通りの中し、ために元帝からもその才を重んじられるに至つた。王朝の成立期において、かかる物質の出現が瑞徴として迎えられるのはいつの世も變りなく、郭璞の行動は巧みに時宜に投じたものであつた。

一方、模索を續けた郭璞の文學も、晉の中興とともに華やかに開花しはじめた。文選江賦注の引く晉中興書によれば、「璞は中興の江外に王宅せしを以て、乃わち江賦を著わして川瀆の美を述ぶ」といわれ、修辭のすばらしさを世に稱せられた。さらに太興元年（三一八）、幽囚の愍帝が没して、すでに名のみの存在であつた西晉王朝が完全に終熄し、元帝がはじめて名實伴う正統の皇位繼承者として天下に認められたとき、郭璞は南郊賦を奏して中興をことほいだ。この一篇によつて元帝に才を認められ、著作佐郎に起用された旨を史書は傳えている。

さて、郭璞の文學についての當時のもつとも普遍的な認識は、文藻粲然として輝やく修辭の妙をその特質とみなしている。試みに文心雕龍と詩品から彼の文體スタイルに對する批評を摘出してみよう。

「景純の綺巧、纏理餘り有り。」（文心雕龍詮賦篇）

「景純の豔逸、中興に冠するに足る。」（文心雕龍才略篇）

「潘岳を憲章す。文體相い輝やき、彪炳翫ふべし。」（詩品中品）

資料を六朝の文學批評の中にのみ求めた形になつたのは故意ではなく、全くの偶然である。唐の李善以後清人に至る後代の批評が郭璞の文學について論評を加えるのは、終始遊仙詩の思想性に關してであり、文體スタイルの輝やかしさなどほとんど問題にされていらないからである。六朝人の批評が多く「文體」について言及するのは、いかにも美文の時代を思わせるが、それとともに郭璞の文學が彼の時代には「文體」の美によつて稱揚されたということも充分考慮に入れておく必要があるだろう。

上に列ねた批評の中でも、詩品は郭璞の詩の源流を潘岳とすることによつて、その文學的特質を端的に概念化してみせている。詩品の潘岳評には、「潘の詩は爛あきらかにして、錦を舒ひらぐるが如く、處として佳ならざるは無し」という謝混のことばが引かれてもいるように、潘岳はまず何よりも

光彩あやなす修辭の妙によつて六朝文學を代表する詩人だからである。郭璞は潘岳から繼承する華麗繁縟な文體の妙をもつて、永嘉の平淡な詩體を一變したというのが詩品の意見であり、問題を修辭の上だけに限るならば、かなりの妥當性をもつ評價といつてよからう。

臨源挹清波

源に臨んで清波を挹くみ

陵崗掇丹莢

崗のぼりに陵のぼりて丹莢を掇ひらう

（遊仙詩第一首）

翡翠戲蘭苕

翡翠蘭苕に戯れ

容色更相鮮

容色をもも相もい鮮もやかなり

（同第三首）

これらの句々は確かに光彩のあざやかなさによつて人を引きつけずにはおかないし、さらに、

閶闔西南來

閶闔のかげ西南より來れば

潛波渙鱗起

潛波は渙として鱗のごとく起る

（同第二首）

の句といい、あるいは江賦の「龍の鱗のごとく絡を結ぶ」の句は、「金谷集作詩」に見える潘岳の有名な對句、

濫泉龍鱗瀾

濫泉は龍の鱗のごとく瀾ちあわだち

激波連珠揮

激波は連なりし珠のごとく揮う

を連想させるかも知れない。

しかし、詩の發想態度、また詩人としての資質の範疇に一步たち至るならば、兩者の相似性は稀薄になる。詩品が郭璞の遊仙詩を「坎壞の詠懷」の作と暗示的に評しているように、思想詩としてみた遊仙詩の系譜は、むしろ阮籍の詠懷詩にこそたどり着べきであろう。清の王士禛が詩品の潘岳源流論について、「尤も陋なり、又深く辨ずるに足らざるなり」（漁洋詩話卷下）と駁したときには、あるいはこのような考慮が働いていたのでもあらうか。

それはともかく、郭璞の文章が六朝人の中で美文の一つの典型として崇敬されていたことは、次に引く南朝の文人江淹の逸話からも窺うことができる。

「嘗て夢に郭璞之（江淹）に謂いて曰く、『君我が五色の筆を借る、今還え見るべし』と。淹即わち懷を探り、筆を以て璞に付す。此より以後、（淹は）材思やや減す。」

（文選卷十六恨賦李善注引劉瓛梁典。同じ話が詩品、南史江淹傳に

詩人としての郭璞（興膳）

も載っている。）

思うに「五色の筆」とは全く比喩の妙を得た評言である。それは単に視覺的な意味による色彩感の豊かさのみを指すのではなく、言語藝術としての抽象化された次元における形象の多彩さをも包含するとみるべきであろう。私たちはこのような過去の批評の位置づけを確かめながら、まず賦の代表作たる江賦から郭璞の文學的世界を探ることにしよう。

斷片を含む郭璞の九篇の賦における一つの特徴は、詠物の賦が全作品のほとんどを占めることである。先に引いた流寓賦・登百尺樓賦に抒情が窺われ、南郊賦が中興王朝への頌歌である以外は、巫咸山賦、鹽池賦、井賦、蜜蜂賦、蚩蚩賦とすべて詠物の賦である。これは陸機、潘岳らの西晉の賦が抒情性によつて賦の歴史にエポックを畫するのはなほだ對照的である。郭璞において、賦のジャンルは抒情の場であるよりは、賦の本來の使命である鋪陳の場としてこそ意識されたように思われる。彼の文體の輝やかさ

はいわば文字による繪畫として發揮されるのであり、「花  
 蒔の時に育つを覽て、盛衰の託する所を察す」(潘岳秋興賦)  
 のごとく比興性に富む自然描寫を構成することにはさして  
 關心をもたなかつたようである。

以上のような意味で、江賦もまた一つの詠物賦にはかな  
 らぬが、しかしこの賦の制作には單なる鋪陳への意欲以上  
 の動機が存在したことを見落してはならぬ。晉書の「璞は  
 中興の江外に王宅せしを以て、乃ち江賦を著わして、川  
 瀆の美を述ぶ」という敘述がすでに暗示するように、江左  
 の建康に都した東晉王朝にとつて、南方の自然を代表する  
 江の流れは、いわば國土の象徴としての役割をもつていた。  
 試みに、左思の三都賦の中でも、吳都賦においてはまず麗  
 々しく川瀆の壯美が強調されることを思うがよい。ここに  
 は後の世の詩人たちがさまざまにその美を稱える江南の好  
 風景が、江の流れを中心にくりひろげられている。中原を  
 追われた亡命者たちは、あるいはこの好風景にも、かつて  
 王粲が登樓賦で洩らした「信に美なりといえども、吾が土  
 には非ず」の嘆きを苦くかみしめていたかもしれない。し

かし一方においてこのような絶望があつたにせよ、それを  
 上まわる東晉の建國という大きな希望が彼らの胸をふくら  
 ませていたこともまた事實であろう。郭璞が江賦を著わし  
 て「川瀆の美」を稱揚したのも、東晉建國の頌め歌を捧げ、  
 また中興に寄せる彼自身の期待を示す意圖を少からずもつ  
 ていたからに違いない。

賦はまず「咨五才の並びに用うる、寔に水徳の靈長な  
 り」と水徳の讚美にはじまり、續いて「惟れ岷山の江を導  
 くや、初め源を濫觴に發す」と大江の微細な源に筆を及ぼ  
 し、次第に巨大な流れに發展してゆく姿を逐次捕えようと  
 する。やがて「六州の域を漉汗し、炎景の外を經營」する  
 までに成長した流れは、中國を南北に分つ自然の境界とな  
 り、萬里の外までその呼吸を及ぼすに至る。ここまで巨視  
 的に大江の流れを跡づけてきた郭璞の筆は、趣きを一轉し  
 て、生命あるもののごとく流動し變轉して極まりない水の  
 諸相を、文字の世界に再現すべく執拗なトレースをはじめ  
 る。その描寫がとりわけ生彩を放つのは、巴東三峽の激流  
 を描く部分であろう。



う驚くべき徹底ぶりを示している。形の異なつた水の部の字が八句三十二字、後には七句二十八字息もつかせずたみかけるように連なつて水勢をあらわす壯觀さに、當時の讀者は讚嘆を惜しまなかつたろう。これだけ多くの文字を使つて、いわば知識の該博さを示すことも江賦の一つの見せ場であつたように感じられる。

水勢の描寫に見られる執拗な筆致は、以下の句々においても屢々その面目を見せる。波濤の次に描かれるのは水中に棲息するさまざま動物である。もつとも、川瀆の描寫に際して、まず流れの様相を概括し、續いて水中・水邊の生物を羅列するのは、すでに漢賦以來の常套的技法であり、司馬相如の上林賦、左思の吳都賦などいづれもその例外ではない。しかし私たちはこの一見月並な技法の中で、郭璞独自の世界がゆたかにひらけているのを發見する。すなわち彼の列挙する動物は比較を絶する多數に上り、しかもそれらの中には尋常でないもの、怪奇な様相を呈するものが極めて多いことが觀取できるのである。かなり長文の引用になることを覺悟の上で、その筆致を跡づけてみることに

しよう。

「魚は則わち江豚海猪、叔簡王鯢、鱗鯀鱗鱗、鱗鱗鱗鱗、鱗鱗鱗鱗、或いは鹿船象鼻、或いは虎狀龍顏、鱗甲錐錯して、煥爛として錦のごとく斑なり。鱗を揚げ尾を掉い、浪を噴き颯を飛ばす。流れを排きて呼哈し、波に隨いて遊延す。或いは采を爆して以て淵を見し、或いは鰓を巖間に嚇く。介鯨濤に乗つて以て出入し、鱗鱗時に順つて往還す。爾うして其の水物の怪錯せるは、則わち潛鵠魚牛、虎蛟鉤蛇、輪蟬蠶媚、鱗鱗鱗鱗、王珧海月、土肉石華、三蛟蝦江、鸚螺蜃蝸、環結は蟹を腹にし、水母は蝦を目にす。紫虻は渠の如く、洪蚌は車を専らにす。瓊蚌は晞曜して以て珠を瑩き、石蚌は節に應じて葩を揚ぐ。蜃蜃は森衰として以て翹を垂れ、玄螭は魄礫として礫礫たり。或いは潮波に泛濫し、或いは泥沙に混淪す。若しくは乃わち龍鯉の一角なる、奇鶻の九頭なる。鼈の三足なる有り、龜の六眸なる有り。鱗鱗は肺のごとく躍つて璣を吐き、文魃は磬のごとく鳴きて以て璆を孕む。倭蟪は翼を拂いて耀を掣げ、神蜃は蠃蠃として以て沈遊す。駉馬は波に騰りて以て嘘蹠し、水兕は

雷のごとく陽侯に咆ゆ。淵客は室を巖底に築き、鮫人は館を懸流に構う。」

これでもかこれでもかといわんばかりに並べたてる郭璞の饒舌にはいささか辟易さえする。登場する動物のいちいちをとりあげて論議をつくす紙幅はないが、文選の李善注が注釋の典據として、しばしば山海經や異物志などの祕書を引いていることからみても、尋常ならざる性質のほどはおしはかられるであろう。もつとも、怪異という点からするならば、こうした賦の中に描かれる動物には、むしろ何がしか尋常ならざる性質を備えたものが多いことは事實である。怪異な動物を列挙することによつて、異常なまでに多彩な雰圍氣を醸し出すとするのであろうか。試みに上林賦と吳都賦から水中の動物を敍した部分を抽出してみよう。

「是において蛟龍赤螭、鉅鱗漸離、鯛鱗鯪紙、禹禹魃、鱗を捷げ尾を掉い、鱗を振り翼を奮い、深蔽に潛み處る。魚鼈は謹しき聲して、萬物は衆夥なり。」（上林賦）

「是において長鯨航を呑み、修鯢浪を吐く。躍龍騰蛇、

詩人としての郭璞（興膳）

蛟鼈琵琶、王鮪鯪鱗、鮑龜鱗鱗、烏賊擁劍、鼈鼈鱗鱗、其の中に涵み泳ぐ。鱗を茸ね甲を鏤めて、詭類舛錯す。泝洄して流れに順い、唵喞して沈み浮ぶ。」（吳都賦）

陸機文賦に「賦は物を體して瀏亮なり」といい、あるいは文心雕龍詮賦篇に「賦は鋪なり。采を鋪ね文を摛き、物を體し志を寫すなり」というように、賦はその文學的特質として、物を敷き列ねることに重きを置く。上林賦、吳都賦の引用部分は、いずれもそうした基盤に立つての描寫であることももちろんであり、この他にもなお張衡の西京賦（文選卷二）、南都賦（卷四）、左思の蜀都賦（卷四）等にも同趣の列挙を見出すことができる。

だが、こうした賦の本質を考慮に入れて吟味するにしても、郭璞の描寫の多彩さを完全に説明したことにほなりそうにもない。羅列された動物の豊富なこと、奇怪なことにかけては、司馬相如も左思も彼に遠く及ばないのである。いつたい郭璞はなぜあれほど雄辯に水中の奇怪な生物について語ろうとするのだろうか。謎を解明する一つの手がかりとなるのは、彼が注釋の大家であり、該博な知識の所有

者だつたことであらう。「爾雅蟲魚に注す、定めて磊落の人には非ざらん」とは唐の韓愈の言であるが（讀皇甫湜公安園池詩書其後）、その爾雅に注した郭璞が「磊落の人」でなかつたかどうかは別問題として、物事の細部に至るまで鋭敏な神經を配る人だつたことは疑いをいれまい。微を極めた水勢の描寫はその如實な顯現の例といえる。いままた水中の生物を描くに際して、水底の隈々にまで觀照の眼を注いで、蘊蓄の限りをつくしてみせるのも當然といふべきであらう。けれどももう一つ注意しておかねばならぬのは、江賦の多彩な敘述を支える彼の旺盛な知識慾が常になにがしか怪異なるものへの強い關心に裏づけられていることである。その著るしい傾向を代表するものとして、彼に山海經注、穆天子傳注のあることは周知の事實だが、中でも山海經に附した序文には、怪異に對する彼の考え方が躍如として表出されている。

世人はみな山海經に闖誕奇怪の言多しとして、その眞實性を疑うが、萬物はさまざまに形態を異にして現象の世界にあらわれるとはいへ、溯源すれば究極同一の原理に歸す

るといふのが郭璞の主張の大前提であり、彼は次のような注目すべき論を展開する。

「然らば則ち其の乖する所以を總べて、之を一響に鼓し、其の變ずる所以を成して、之を一象に混すれば、世のいゆる異なるものは、未だ其の異なる所以を知らず、世のいゆる異なるならざるものは、未だ其の異なるならざる所以を知らざるなり。何となれば、物自らは異ならず、我を待ちて後異なればなり。異は果して我に在りて、物の異なるにはあらざるなり。故に胡人は布を見て麤（麻布）を疑い、越人は罽（毛織の布）を見て毳（細毛で織つた布）に駭く。夫れ習い見る所を翫して、希に聞く所を奇とするは、此れ人情の常蔽なり。」

物にはもともと怪異な性質は存在しない。それが怪異なるものとして認識されるのは、人の主觀がそうさせるのである。——この發想は少くとも當時の中國人として普遍なものではない。序文の後段で彼はまた言葉を改めて、「鑿るに滯蹊なく、曲さに幽情を盡くせば、神焉んぞ庾さんや、神焉んぞ庾さんや」と怪異の存在を否定しているが、この

一文が論語爲政篇の「其の<sup>もち</sup>以る所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人焉<sup>いず</sup>んぞ<sup>み</sup>庚さんや、人焉<sup>いず</sup>んぞ<sup>み</sup>庚さんや」のパロディであることは明白であり、普遍な道理の裏をかいた逆説として發言されていることも容易に理解されよう。これはあの奇怪な逸話の數々によつてその傳記を彩られる人物の發言としていかにもふさわしいことば

ではあるまいか。山海經に對する郭璞の興味のあり方は、常識の彼岸に設定された怪異の世界に彼自ら參入して、その世界のさまざまな存在に、人間が實世界の日常的事物に對すると等しい眼をもつて對處するといふ態度に貫かれている。一見奇怪な様相を呈する山海經の動植物も、この世界のどこかに必ず存在するといふ確信が太い筋金として通つてゐる。山海經に關心を示した詩人としては陶淵明があり、その讀山海經十三首の詩は廣く知られているが、彼は恐らく郭璞と同じ態度で怪異に接しはしなかつただろう。太陽と競走し力盡きて倒れ死んだ夸父、小さな木や石を運び續けては、かつて自分を溺死させた滄海に復讐を企てる精衛——これらの説話を事實として實感するのは淵明の態

詩人としての郭璞（興膳）

度ではない。彼は説話から觀取される夸父の並はずれた壯大な志や精衛の止むことなき執念を、自らの感懐の投影として描く態度を關心の根底に藏していた。郭璞が注釋によつて、淵明が詩によつてそれぞれの關心を示すのも、二人の態度の違いを象徴しているように思われる。

話題がやや横道にそれたが、江賦においても、郭璞は怪異なるものの群に自ら參入する。彼は常識が不可視とする世界を透視して常人の視野の及ばぬ景觀を次々と展開してみせるのである。こうした興味のあり方は賦の後段でも持續されている。

「爰<sup>こゝ</sup>に包山の洞庭、巴陵の地道有り。潜<sup>ひそ</sup>める遠<sup>あな</sup>は傍通し、幽<sup>ひそ</sup>やかなる岫<sup>かま</sup>は窈窕<sup>ようてう</sup>たり。金精玉英は其の裏に瑱<sup>まじ</sup>わり、瑤<sup>よう</sup>珠怪石は其の表に碎<sup>まじ</sup>わる。飄<sup>りま</sup>蚪<sup>とう</sup>は其の址に摻<sup>めく</sup>り、梢雲は其の<sup>いた</sup>標<sup>たか</sup>に冠<sup>かむ</sup>す。海童の巡遊する所、琴高の靈矯<sup>ひさま</sup>する所なり。冰夷は浪に倚<sup>よ</sup>つて傲<sup>ごう</sup>睨<sup>げい</sup>し、江妃は嘔<sup>ひさま</sup>を含<sup>ひ</sup>みて矚<sup>め</sup>眇<sup>びやう</sup>す。凌波を撫<sup>な</sup>して曼<sup>ま</sup>のごとく躍<sup>あ</sup>り、翠霞を吸<sup>ひ</sup>いて夭<sup>よう</sup>矯<sup>きやう</sup>たり。」

海童、琴高はいずれも仙人、冰夷、江妃はともに水神である。地底に潜み隠れる地脈に契機を得た連想は、常識の

埒外の存在たる鬼神のイメージを呼ぶに至る。これはまさに江を舞臺とした一篇のファンタジーである。想像力のみがよく至りうる神祕の世界である。

この後描寫は趣きをやや變え、水上に舟をあやつつて魚を追う漁民、舳艫あい接して遠隔の地に交益する商人の活躍を江の流れと織りなしつつ描いているが、賦がいよいよ結尾に近づくと、郭璞の筆は再びあの神祕の世界へ回歸してゆく。

「爾うして乃わち之を域るに盤巖をもつてし、之を豁くに洞壑をもつてし、之を疏つに滄汜をもつてし、之を鼓つに朝夕をもつてす。川流の歸溱する所、雲霧の蒸液する所、珍怪の化産する所、傀奇の窟宅する所。隱淪の列眞を納め、異人を精魄に挺んで、靈潤を千里に播き、岱宗の觸石に越ゆ。其の譎變の儼怳なるに及んでは、符祥一に非ず。動應方無く、事に感じて出ず。天地を經紀し、人術を錯綜す。妙は之を言に盡くすべからず、事は之を筆に窮むべからず。」

(筆舌に盡くし難いが)という但し書きの後に列ねられ

る江の妙は、天に上つて東井の星となつた岷山の精、自らの精神を江の大波と化せしめた陽侯、江の神たる奇相、湘水の神たる湘夫人、舟を襲つた黃龍を徳によつて退散させた禹、太阿の名劍でみごと蛟をしとめた飲飛……どれもこれもすべて遠い太古の時代から民族の血の中を流れつづけてきた大江の豊かな傳説である。澎湃として盡きぬ底知れぬ流れの奥に、宇宙の元氣を祕めるかのような大江——この巨大で神祕な對象に向つて、詩人は最後にもう一度讚嘆のことばを發せずにはいられない。「煥かに大塊の形を流し、萬ぶつを混じて一科に盡くす。虧けざるを保ちて永えに固く、元氣を靈和に稟く。川瀆を考えて妙觀するに、實に江河より著るしきは莫し。」かくて讚嘆のうちに千六百八十二字の長篇江賦は終る。

江賦の描寫を問題にしながら、私は怪異性の面からのみ論を運びすぎたきらいがあるかもしれない。ことさらに怪異性があげつらわれるのを郭璞は嫌つて、自分もつとも多ク心を注いだ辭句の雕琢にこそ眼を向けてくれというかもしれない。しかしそれでもなお江賦の最大の特徴がここ

にあることは、すでに動かせぬ事實であると私は敢て言つておこう。

#### 四 遊仙詩——その一——

詩人としての郭璞のもつとも重要な著作は、やはり遊仙詩に指を屈せねばならぬ。文選にはその七首がおさめられ、民國の丁福保の全漢三國晉南北朝詩は十四首を収載する。

(以下で引用する詩の番號は丁福保の書の順序による。ただし同書でも最初の七首は文選の排列に準じている。) そのうち完篇とみられるのは十首で、残りの四首は断片を存するのみである。また詩品が引く「奈何虎豹姿」「戢翼棲榛梗」の二句はこの十四首の中にも見えないから、「遊仙詩」と命名される彼の詩は本来もつと多かつたのであろう。

遊仙詩の制作時期は定かでないが、「靈谿」(第一首)、「青谿」(第二首)等の地名が、文選李善注の引く庾仲雍の荊州記に従えば、いずれも荊州(湖北省の江陵のこと)に屬することからしても、南遷後の作に係ることは確實である。清の陳沆の詩比興箋は、青谿が荊州の臨沮縣にあるこ

詩人としての郭璞(興膳)

とを根據として、遊仙詩を郭璞が王敦の參軍となり荊州に在つた晩年の作とするが、十四首の詩は等しく「遊仙詩」の名を冠してはいても、それぞれの詩がはらむ内容はかなり多岐にわたつており、恐らく短時日に集中的に創作された連作詩ではあるまい。阮籍の詠懷詩がすでにさうであつたように、相當長期にわたつて創作された詩を、總括的に「遊仙詩」の名のもとにまとめたとみるのが一應妥當かと思われる。

さて、古來郭璞の遊仙詩は諸家の同題の作品と異なり、單に列仙への憧憬を列ねるのではなく、一種の思想詩としての性格をもつことが定評となつてゐるが、この評價は事實上鍾嶸の詩品によつて確立されたといつてよい。

「<sup>た</sup>但だ遊仙の作は、詞に慷慨多く、文示より乖離す。其の『奈何虎豹姿』と云い、又『戢翼棲榛梗』と云うは、乃わち是れ坎壈かんらんの詠懷にして、列仙の趣きに非ざるなり。」

後代の諸家の遊仙詩評は多かれ少なかれこの詩品の言を意識して、ある場合にはそれへの反駁を伴いつつ發言されている。

「凡そ遊仙の篇は、皆塵網を滓穢とし、纓絡を鎔銖とし、霞を倒景に喰い、玉を玄都に餌う所以なり。而るに璞の制は、文に自斂多し。志は中區を狹しとすといえども、辭は俗累を兼ぬ。前識に非らるるも、良に以有るかな。」(文選卷二十一遊仙詩李善注)

「遊仙詩は本と託するところ有りて言う。坎壇の詠懷、其の本旨なり。鍾嶸の其の列仙の趣き少なきを貶せしは謬りなるかな。」(沈德潛古詩源卷三)

「景純は本と仙姿を以て、方の内に遊ぶ。其の恆情を超越するは、乃わち造語の奇傑に在りて、命意に關するには非ず。遊仙の作は、明らかに寄託の詞に屬す。如し列仙の趣きを以て之を求むれば、其の本旨には非ざるなり。」(陳祚明采叔堂古詩選卷十二)

「景純の遊仙は、當に屈子の遠遊と同旨なるべし。蓋し自ら坎壇して匡濟を爲さざるを傷む。旨を懷生に寓して、用て以て鬱を寫ぐ。鍾嶸の詩品、其の列仙の趣き無きを譏るは、此れ辭を以て意を害うものなり。」(何焯義門讀書記)

「景純の遊仙は、響を兩音に振う。鍾嶸の『其の詞に悚

慨多く、玄宗より乖遠す。坎壇の詠懷にして、列仙の趣きに非ず」と謂いしより、李善も亦た「其の文に自斂多く、いまだ霞を倒景に餐し、塵網を鎔銖とする能わず。前識に非らるるは、良とに以無きに匪ず」と謂う。諸を宏農(郭璞)に質さば、竊かに啞然たらんことを恐る。(中略)何焯の「景純の遊仙の作は、即わち屈子遠遊の思いなり」と謂いしは、知言に殆きか。」(陳沆詩比興箋卷一)

「郭璞の遊仙詩は、屈子遠遊の指に本づきて其の辭を擬し、遂には佳製を爲す。」(方東樹昭昧詹言卷三)

すべての批評が遊仙詩を單なる「列仙の趣き」とみなさぬ點で一致しながら、なお鍾嶸に多少の駁を加えようとするのは、彼の評に見える「詞に慷慨多く、玄宗より乖遠する」こと、「坎壇の詠懷にして、列仙の趣きに非ざる」ことを貶辭と解釋するからにほかならぬ。つまり「郭璞の遊仙詩が列仙の趣きに非ざる」ことを、「AはBでない」という單純な否定ではなく、「Aは當然Bであるべきなのに、事實は不當にもそうでない」という價值觀を含む否定とみなすのである。もし鍾嶸の本旨がそこにあるとすれば、彼

は「列仙の趣き」のないことによつて遊仙詩の價值を滅殺し、逆に後代の評は「列仙の趣き」を超越したことを積極的に評價するという二つの全く相い反する立場が存在することになる。しかし私は、古直が「案ずるに『玄宗より乖遠し、列仙の趣きに非ず』とは、其の名は遊仙なりといえども、實は則わち詠懷なるを言う。貶辭には非ざるなり」(鍾記室詩品箋)というように、鍾嶸の評を價值觀を別にした單なる事實の否定と考える解釋も可能であろうと思ふ。千篇一律の「列仙の趣き」の方に鍾嶸が與したとは私には思ひ難い。

それはともかく、諸家の批評の中で何焯および方東樹が遊仙詩を楚辭の遠遊に擬していることは充分注目に値する。遠遊の冒頭に「時俗の迫厄を悲しみ、輕擧して遠く遊ばんことを願う」というように、人が神仙を求めて塵俗の世を去ろうとする志向には、現世のさまざまな苦悶や悲哀を別なる高い次元において止揚せんと願う氣持がこめられている。曹植の遠遊篇にしても、その名の示すごとく、楚辭遠遊の發想を多分に意識したものに違ひあるまい。遊仙詩に

詩人としての郭璞(興膳)

思想性の生まれる契機がここには潜んでいるようである。またもつとも素朴な形で神仙へのあこがれは、無限の壽命を保ちたいという、人間の所詮かなえられることのない願望から生じている。漢代の古詩十九首にはすでにこの種の發想を瞥見できるが、また魏の文帝曹丕は「芙蓉池作」で次のようにうたつている。「壽命は松喬に非ざれば、誰か能く神仙なるを得ん。傲遊して心意を快くし、己れを保ちて百年を終えん。」神仙と化して松栢の壽を保ちえぬ悲しみを、現世の快樂を盡くすことによつて癒やそうというのである。人生短促の嘆きを洩らしたのはひとり曹丕のみではない。曹植をはじめとする建安の詩人、阮籍、嵇康ら正始の詩人、そのいずれもが折に觸れ物に觸れ、この嘆きを口にせぬことはなかつた。魏晉の時代に盛行した遊仙詩が、久遠の壽命を保つ列仙の姿を點綴して、長生への憧憬をいつそうふくらませていつたこともまた事實であろう。現在見ることでできる魏晉の詩の中で、「遊仙」の題をもつとも古い作品は、藝文類聚卷七十八の引く曹植の一首であるが(もつとも、樂府詩集が「折楊柳行」の名

で收める曹丕の詩を、藝文類聚は「遊仙詩」と題して收載しているので、これも併せてあげておくべきかもしれない。以後嵇康、張華、張協、成公綏、何劭、庾闡の遊仙詩が闕文を含めて十數首、また文選李善注に引かれる鄒潤甫、王彪之の遊仙詩斷片などが目に觸れる。それらはみな詩人自らを神仙境に遊ぶものと想定し、筆の限りを盡くして理想世界の美觀を描きたてる。いま諸家の作品の中から一二例を拾つてみることにしよう。

遊仙詩

嵇康

遙望山上松

遙かに山上の松を望めば

隆谷鬱青葱

隆き谷に鬱として青葱たり

自遇一何高

自ら遇して一に何ぞ高き

獨立迥無雙

獨立して迥かに雙び無し

願想遊其下

願わくは其の下に遊ばんと想うも

蹊路絶不通

蹊路は絶えて通ぜず

王喬棄我去

王喬は我を棄てて去り

乘雲駕六龍

雲に乗つて六龍に駕す

飄飄戲玄圃

飄飄として玄圃に戯れ

黄老路相逢

黄老と路に相い逢う

授我自然道

我に自然の道を授け

曠若發童蒙

曠かにして童蒙を發くが如し

採藥鍾山隅

藥を鍾山の隅に採り

服食改姿容

服食して姿容を改む

蟬蛻棄穢累

蟬蛻して穢累を棄て

結友家板桐

友を結びて板桐に家す

臨觴奏九韶

觴に臨んで九韶を奏すれば

雅歌何邕邕

雅歌何ぞ邕邕たる

長與俗人別

長く俗人と別れん

誰能覩其蹤

誰か能く其の蹤を覩ん

永遠の生命を象徴するように青々と山上高くそびえ立つ松は、詩人の心に強く遊仙への志向を催し、詩は以下仙化を求めて現世を棄てた詩人が仙都に至つて蟬蛻を遂げるまでの過程を逐次展開してゆく。「青青たる陵上の松、亭亭たる高山の柏」の句にはじまる何劭の遊仙詩も、手法の上ではこれに似る所が多い。一方張華、張協、庾闡らの詩になるとやや趣きが變つて、詩人の興味は専ら仙界の景觀を

精緻に細微に描く方向に傾いている。

遊仙詩 庚闌

三山羅如粟 三山 羅ること粟の如く

巨壑不容刀 巨壑 刀をも容れず

白龍騰子明 白龍 子明を騰げ

朱鱗運琴高 朱鱗 琴高を運ぶ

輕舉觀滄海 輕舉して滄海を觀

眇邈去瀛洲 眇邈として瀛洲を去る

玉泉出靈壘 玉泉 靈壘を出し

瓊草被神丘 瓊草 神丘を被う

俯瞰的な構圖の中に、一篇の華麗な神仙界の繪巻がくり

ひろげられている。

さて、魏末から晉の時代においては、遊仙詩が展開する神仙界の景觀を單なるイメージとしてではなく、人が業を修めることによつて實際に到達し得る境地と考える、いわゆる神仙思想が無視できない思潮として形成されてくる。こうした思想を育てる土壌となつた當時の社會については第一章でいささか考察を致したが、仙界への志願者である

詩人としての郭璞（興膳）

道士たちは名山にこもり、孤獨に堪え、虎狼の危害を侵して、ひたすら現世に彼らのユートピアを實現すべく精進を重ねたのである。神仙思想を知る大きな手がかりとなる資料はいうまでもなく葛洪の抱朴子であるが、その中には神仙に對する當時の認識を窺わせる次のような一節がある。

長生で知られる彭祖がいうには、天上には「尊官」「大仙」が多く、新參の仙人は多くの上役に仕えて大變な苦勞をしなければならぬ。だから自分（彭祖）はあくせくとして天に登るよりは、むしろこの地上に止まることを選び、以來八百年の命を保つていと。葛洪はこれに論評を加えて、「篤く之を論ずれば、長生を求むる者は正に今日の欲する所を惜しむのみ。本とより虚に昇るに汲汲とせず、飛騰を以て地上に勝るとせざるなり。若し幸にして家に止まりて死せざるべき者は、亦た何ぞ必らずしも速やかに天に登るを求めんや。」と地上での仙化の可能性を説いている。（以上抱朴子對俗篇から）かく現世にとどまつた仙人は地仙と稱され、彼らはこの世での長生を極めて、然る後に徐々に昇天すればよいという論が同勸求篇にもみえる。彭祖

の言としてみえる天界の構成が、上役の前で小さくなつていなければならぬ官僚機構を思わせて苦笑を誘うが、これは神仙の世界がかなり現実的な眼で認識されていた一面を示唆するとも考えられよう。このように神仙を實現可能な理想像として認識する風潮も、遊仙詩の盛行を促す有力な要因となつていたことを考慮すべきであろう。

## 五 遊仙詩——その二——

前章で説いたように、郭璞の遊仙詩を、題名の豫想させる「列仙の趣き」を超越した思想詩とみるのが歴代の批評家の一致した意見であるが、この見方は半面遊仙詩を郭璞のメタフィジックの表現としてのみ規制しがちで、彼の思想における遊仙の意味を捨象する傾きをもつている。そのもつともいい例が陳沈の詩比興箋で、彼はそこに引いた九首の詩すべてを遊仙の辭に包まれた寓意の作とみなしている。私たちは郭璞の思想がともかく遊仙と題する詩の中で開陳されているという基本的事實を踏まえて、彼における遊仙の意味を跡づけてみる必要がありはしないだろうか。

もう一つ誤解されやすいのは、郭璞は諸家の詩に表出されるような「列仙の趣き」に全く關心を示さなかつたのかということである。敢て言えば、私は彼こそ他のいかなる詩人にも増して遊仙に關心を抱いていた、そして關心の切實さゆえに思想すらそこに宿すことができたのだと考えたい。鍾嶸をはじめとする批評が遊仙詩としての異質性にのみ目を注いで、彼の詩における「列仙の趣き」を見過したのはいささか遺憾である。その中でただ陳祚明の評だけがすべてを詠懐の詩とすることの無理をよく看破している。

「弘農の遊仙詩十四篇、誦すべきものは十。前の七篇は昭明の收むる所にして、毎に託するところ有りて之に逃るの意を寄す。後の三篇は直だ遊仙を言う。語は頗る奇邁なるも、但だ意を寄する所無く、便わち平實なるを覺ゆ。乃わち知る、文選の鑒別頗る高く、全て旨趣を論じて、修詞を取らざるを。」（采叔堂古詩選卷十二）

託意の作品は文選所收の七首のみで、他は單に遊仙の讚美に終始する平實な詩にすぎぬとする評であり、第八首以下下の三首に託意が皆無か否かはしばらく問わず、仙界の巧

緻な彫琢に多くの意が拂われている點では傾聴すべき指摘とせねばならぬ。いま第十首の詩を引いて検討を加えてみることにしよう。

璇臺冠崑嶺 璇臺 崑嶺に冠し

西海濱招搖 西海 招搖に濱す

瓊林籠藻映 瓊林は藻の映やきを籠め

碧樹疏英翹 碧樹は英の翹るを疏く

丹泉漂朱沫 丹泉には朱き沫の漂い

黒水鼓玄濤 黒水には玄き濤の鼓す

尋仙萬餘日 仙を尋ねて萬餘日

今乃見子喬 今乃わち子喬を見る

振髮晞翠霞 髮を振いて翠なる霞に晞し

解褐被絳綃 褐を解いて絳き綃を被る

總轡臨少廣 轡を總べて少廣に臨めば

盤虬舞雲輅 盤まれる虬は雲輅に舞う

永偕帝鄉侶 永く帝郷の侶と偕に

千齡共逍遙 千齡 共に逍遙せん

まず描かれるのは崑崙、招搖の二つの奇峰、ともに古え

詩人としての郭璞（興膳）

の地理書山海經にその名が見えている。（崑崙山の名は西山經、海外南經および海内西經に、同様に招搖山については南山經および大荒東經にその名が見える。）山中には緑の樹々とその華麗な花が玉にまがう輝やきを籠め、丹泉、黒水の流れが山の狭間を縫つてゆく。こうしてくりひろげられる仙境の景觀は、あるいは山海經の描寫の影響下にあるかとも想像できる。例えば同書の冒頭、南山經は次のような敘述ではじまる。

「南山經の首を誰山と曰う。其の首を招搖の山と曰い、西海の上に臨む。桂多く金玉多し。草有り、其の状は韭の如くして青き華なり。其の名を祝餘と曰い、之を食えば飢えず。木有り、其の状は穀の如くして黒き理あり、其の華は四もを照す。其の名を迷穀と曰い、之を佩ぶれば迷わず。（中略）麗馨の水出でて、西流して海に注ぐ。其の中に育沛多く、之を佩ぶれば瘕疾無し。」

山名の後にその山の動植物のさまを敘し、次いで山中に源を發する河川について記すのは、山海經におけるもつとも常套的な描寫法であり、この書の注釋者でもある郭璞が

かかる技法をイメージの骨子として利用したことは充分考  
えられてよいであろう。ついでに記すと、黒水は崑崙山に  
出る川として西山經その他に見え（尙書禹貢にもその名が見  
える）、丹泉については本文にその名はないが、海外南經の  
郭注に赤泉なる泉が見えており、あるいはこれからの連想  
かもしれない。

一首の趣きとしては、庾闡らの遊仙詩に共通する點が多  
く、筆致の妙、粉飾の巧をつくして神仙界の美觀を讀えて  
いる。ことに目にとまるのは色彩語の多用であろう。碧樹、  
丹泉、朱沫、黒水、玄濤、翠霞、絳綃と目まぐるしいばか  
りに多様な色彩が次々と眼にとび込んでくる。「五色の筆」  
はここでもその妙手を揮つてゐる。

ところで陳沈の詩比興箋によれば、この一首は郭璞が自  
らの死を豫知して、辭世の感慨を綴つたもののだといひ、そ  
れを示唆することばとして「尋仙萬餘日、今乃見子喬」の  
二句を擧げている。彼の四十數年の生命を日に換算すれば  
まさに「萬餘日」となるところから、陳沈はこの説をたて  
たのであろうが、一首全體の調和からすれば、穿鑿の誇り

を免れまい。やはり仙界の描寫に力點を置いた詩とみてよ  
いではなからうか。

「萬餘日」の語について一言觸れておくと、日を單位に  
して生命の長さを示した例としては、抱朴子勸求篇に「百  
年の壽も三萬餘日なるのみ」とあり、そのあと「人の世間  
に在りて日に一日を失するは、牛羊を牽きて以て屠所に詣  
るが如し。一步を進むる毎に、死を去ること轉た近し」と  
いう里諺を引いて、人が生命の長さを恃むことの愚を戒め  
ている。郭璞の「萬餘日」も、あるいは自叙としての性質  
をもつにしろ、生命を日數という微小な單位に置き換える  
ことによつて、人生の短促をさらに際立たせる神仙家的な  
發想に出るのであろう。因みに唐の李白には「三萬六千日、  
夜夜當秉燭」（古風其二十三）「聖君三萬六千日、歲歲年年  
奈樂何」（陽春歌）「百年三萬六千日、一日須傾三百杯」（襄  
陽歌）など同趣の愛用句のあることを言い添えておこう。

さて、「尋仙萬餘日、今乃見子喬」の句を陳沈の説の如  
く特殊化するのは無理として、この句が別の意味で郭璞詩  
の特色を示していると言えぬことはない。それはこの二句

が仙化の過程としての「萬餘日」の仙道修業を暗示するとに起因する。郭璞の詩では諸家の遊仙詩のように單に仙界の神秘な景觀を描き盡くそうと努めるだけでなく、そのような仙境に到る階梯として、常に名山での隱遁と精進を提示していることに注意せねばならぬ。例えば第九首ではまず「藥を採つて名山に遊び、將に年の頽るるを救わんとす」と入山がうたわれたのち、「登仙して龍駒を撫し、迅駕は奔雷に乗る」と仙化の姿が描かれ、第十一首では「嶽に登つて五芝を採り、澗を涉つて六草を將る」という句のあと、「髮を散らして玄き溜に蕩い、終年華皓ならず」と長生が描かれている。この特色は連作第一首の詩にすでに はつきりと示されている。

京華遊俠窟 京華は遊俠の窟

山林隱遯棲 山林は隱遯の棲すみか

朱門何足榮 朱門も何ぞ榮とするに足らん

未若託蓬萊 未だ蓬萊に託すに若かず

臨源挹清波 源に臨んで清波を挹み

陵崗掇丹萸 崗に陵つて丹萸を掇う

詩人としての郭璞（興膳）

靈谿可潛盤 靈谿 潛盤すべし

安事登雲梯 安んぞ雲梯に登るを事とせん

漆園有傲吏 漆園に傲吏有り

萊氏有逸妻 萊氏に逸妻有り

進則保龍見 進めば龍見を保ち

退爲觸藩羝 退けば藩に觸るる羝と爲る

高蹈風塵外 風塵の外に高蹈し

長揖謝夷齊 長揖して夷齊に謝せん

まず語られるのは、「京華は遊俠の窟、山林は隱遁の棲」と山中隱棲の稱讚であるが、それは山水の美に魅せられての隱遁ではなく、仙化を實現すべき環境として山林が想定されているのである。しかし、仙人が昇天の際に用いられる「雲梯」を登つて仙界に至ろうとするのではない。「靈谿」は李善の引く庾仲雍の荊州記によれば、荊州の水名の由であるが、この地上の山林にこそユートピアを實現するのである。（蛇足までにつけ加えると、荊州記は道書の一つとして抱朴子遐覽篇にその名が記載されている。荊州記と題する書は數種存するが、庾氏のそれを含めて恐らく荊州の名山の案内

書のような性格をもつていたのだろう。抱朴子に「道を爲し樂を合わせ、及び亂を避けて隱居する者は、山に入らざるは莫し」(登涉篇)というように、當時の仙道修業者は然るべき名山の奥深く身を隠して仙化に勤めた。郭璞の意圖する隱遁はまさにこれでなければならぬ。もとよりそれは伯夷、叔齊が周粟を食むをいさぎよしとせず、首陽山に隠れて餓死したような消極的な隱遁ではない。すなわち「長揖して夷齊に謝せん」と言うゆえんである。左思の招隱詩に「惠連は吾が屈に非ず、首陽は吾が仁に非ず」の句があることも思い合わすべきであろう。

魏の末期ごろから社會的現象として隱逸思想が流行し、晉書隱逸傳には陶淵明まで含めて實に三十九人の隱者たちがその名を列ねている。隱遁への志向はまた郭璞以前の多くの詩人が夙に表現したところでもあり、阮籍の詠懷詩についてみれば、「馬を驅りて之を捨て去り、去りて西山の趾に上る」(其三)、「下に采薇の土有り、上に嘉樹の林有り」(其九)、「(東)園と綺(里季)は南岳に遷れ、伯陽は西戎に隱る」(其四十二)、「巢(父)と(許)由は高節を抗げ、

此に従つて河濱に適く」(其七十四)などの句をその例として擧げることができる。阮籍はまた「獨り延年の術有り、以て我が心を慰むべし」(其十)、「三芝は瀛洲に延び、遠遊して長生すべし」(其二十四)などとうたつているように、遊仙にも關心を示した人であつたが、彼の詩中で隱遁の志向を示す句は決して遊仙の志に結びつかない。裏を返して言う、遊仙の志の見える詩に隱遁への志向や讚美は存在していない。つまり阮籍の意識においては、隱遁と遊仙はともに世上の矛盾あるいは苦悶を止揚する手段と考えられていたが、その二つはなお連絡のない別個のものとして存在するにすぎなかつた。先に見た嵇康や何劭の遊仙詩が山上の松柏を描くにしても、それは永遠の生命の象徴としての性格が強く、その山中が仙化を遂げるべき場所として意識されてはいないようである。郭璞の遊仙詩に至つて隱遁と遊仙とが一つの理念として統一されているのは、くり返し述べたように、彼の隱遁が道教的な仙化の志向に裏づけられていたからにはかならぬ。

しかしこの一首の中で、詩人の目が全く反社會的な隱棲

一方に向いていると考えるのは正しくない。「京華は遊俠の窟」といい、「朱門も何ぞ榮とするに足らん」という句は、幽微にはあるが、彼の現實把握の一面を窺わせるに足る。山上の矮小な苗木が谷底の巨松を蔭らせる光景に、門閥貴族政治の不條理を象徴させた左思の詠史詩ほど顯著ではないにしろ、京華、朱門に對する吐き出すような侮蔑のことばには、社會的に報われる所の少い寒門の士の憂憤が滲み出ていよう。また第六首の「雜縣魯門に寓し、風暖かくして將に災いを爲さんとす」(天災の兆しを示す海鳥が魯の東門に止つたのを、臧文仲が何も知らず祭つたという故事を踏まえる)の二句を、陳沆は王敦の變を裏に寓する句であるとすするが、具體的な事實はどうあれ、何らかの社會不安を敏感に感取しての表現であることは確かだろう。諸家の遊仙詩にはみられぬ寓意の面白さがここにある。

雜縣寓魯門

雜縣 魯門に寓し

風暖將爲災

風暖かくして將に災いを爲さんとす

吞舟涌海底

吞舟 海底に涌り

高浪駕蓬萊

高浪 蓬萊に駕す

詩人としての郭璞(興膳)

神仙排雲出 神仙 雲を排いて出で

但見金銀臺 但だ金銀の臺を見る

陵陽挹丹溜 陵陽 丹溜を挹み

容成揮玉杯 容成 玉杯を揮う

姮娥揚妙音 姮娥 妙音を揚げ

洪崖領其頤 洪崖 其の頤を領す

升降隨長煙 升降して長煙に隨い

飄飄戲九垓 飄飄して九垓に戯る

奇齡邁五龍 奇齡なること五龍を邁ぎ

千歳方嬰孩 千歳なるも嬰孩に方し

燕昭無靈氣 燕昭 靈氣無く

漢武非仙才 漢武 仙才に非ず

最初の二句で社會に對する不吉な豫感を述べた郭璞は、思いを遙かな理想の世界に馳せて、身を區外に置こうとし、さまざまに意匠を凝らして描かれる仙境の景觀は、例によつてきらびやかで神秘的雰囲気を漂わせている。しかしそれだけならごくあたりまえの遊仙詩に過ぎない。郭璞の面目は最後の二句に至つてあらわれる。「燕昭は靈氣無く、漢

武は仙才に非ず——これは俗界の支配者たる帝王に向つて投げかけた冷やかな嘲笑である。俗界のあらゆる權力を掌握する帝王をもつてしても仙化を實現することはできない。それをよくなし遂げ得るのはただ靈氣、仙才を生まれながらに備えた者のみである。俗社會では寒門の子として常に思い屈していなければならなかつた郭璞は、遊仙にと寄せて胸中の鬱を散じたのであろう。遊仙詩が郭璞の詠懐と評されるのもまことに故なしとしない。

この章の主な意圖は郭璞における遊仙の意味を跡づけて、仙界描寫のあり方を具體的に捕らえることにあつたが、最後に仙界描寫に一つの典型を示す第三首の詩についてなごめることにしよう。

- 翡翠戲蘭苕 翡翠 蘭苕に戯れ
- 容色更相鮮 容色 更こもも相あい鮮あやかなり
- 綠蘿結高林 綠蘿 高林に結び
- 蒙籠蓋一山 蒙籠として一山を蓋う
- 中有冥寂士 中に冥寂の士有り
- 靜嘯撫清絃 靜かに嘯き清絃を撫す

放情陵霄外 情を放はままにして霄外そとに陵り

嚼藥挹飛泉 藥を嚼くみて飛泉を挹くむ

赤松臨上遊 赤松 上に臨んで遊び

駕鴻乘紫煙 鴻に駕かして紫煙に乗る

左挹浮丘袖 左に浮丘の袖を挹とり

右拍洪崖肩 右に洪崖の肩を拍たたく

借問蜉蝣輩 借問す 蜉蝣の輩

寧知龜鶴年 寧いずぞ龜鶴の年を知らん

詩の前半に描かれるのは、鬱蒼と緑の茂る名山と、そこに跡をひそめて仙道に勵む隱士の姿である。これは招隱詩が描く世界に酷似するが、郭璞の描寫はここから直ちに仙界に連つて、浮丘公、洪崖らの仙人と交歓する暢達者のイメージを登場させる。郭璞の意識において、隱棲と仙化が緊密な紐帯に結ばれるものであつたことがここでも示されている。描寫として警拔なのは「左挹浮丘袖、右拍洪崖肩」の二句であり、仙界の景觀として他の詩人に見られぬ新鮮さが感じられる。山海經海外西經の「(巫咸)右手操青蛇、左手操赤蛇」(海外北經にも同じ表現がある)などから詩人の

イメージが育てられたと考へては穿鑿に過ぎるだらうか。

## 六 遊仙詩——その三——

遊仙が郭璞にとつて觀念の遊戲ではなく、隱棲と精進を通じて實現され得べき境地として認識されていたとすれば、仙化の理は當然彼の實生活を大きく規範する理念として働いていたはずである。また靈異に通ずるさまざまな能力は、彼に理想を踏み行わせるべき充分な資格を賦與していたはずである。思想の次元でこれまで考へてきた仙化の理が郭璞において一たび行動の次元に轉化したとき、彼の認識は、いかに反應していつたのか、私たちはそれを詩の中から探つてゆくことにしよう。

青谿千餘仞 青谿 千餘仞

中有一道士 中に一道士有り

雲生梁棟間 雲は梁棟の間に生じ

風出窗戶裏 風は窗戶の裏に出づ

借問此何誰 借問す 此れ何誰なるやと

云是鬼谷子 云う 是は鬼谷子と

詩人としての郭璞（輿膳）

翹迹企穎陽 迹を翹げて穎陽を企み

臨河思洗耳 河に臨んで洗耳を思ふ

闔闔西南來 闔闔しやうこうのかげ西南より來れば

潛波渙鱗起 潛波は渙として鱗のごとく起る

靈妃顧我笑 靈妃 我を顧みて笑い

粲然啓玉齒 粲然として玉齒を啓く

蹇脩時不存 蹇脩けんしゆう 時に存せざれば

要之將誰使 之を要むるも將に誰をか使とせん

十四首の第二首である。詩は例によつて山中の靜謐に身を潛める道士の描寫にはじまり、傳説的な隱者許由への思慕を通して隱遁への志向が述べられている。ところで詩は最後の四句に至つてはなはだ晦澁となる。晦澁さの原因は、この四句に作者の寓意が感じられながら、判然とその眞意を測り難いことにある。靈妃とは洛水の神となつた宓妃のことであり、彼女の艶然たる微笑に心惹かれながら、蹇脩のような媒妁人を得ぬために、ついに近寄ることもできぬというのが一應の解釋であろう。離騷の一節を典據とした描寫であることはいままでもない。⑩

の在るところを揣摩することにすれば、靈妃のにこやかな笑みは蟬蛻への甘美な誘いを象徴し、心は強くそれに惹かれながら仙境に到る手段を求め得ず、暗澹として洩らす絶望のつぶやき、それが最後の「之を要むるも將に誰をか使とせん」の一句となつて吐き出されたものではあるまいか。

人が己れの抱く理想に對して眞摯であればあるほど、その幻滅を知つたときの味は苦いのである。しかし郭璞はまた一方で理想を踏み行うことの可能性を自ら疑つてもいた。

自嘲の文章「客傲」の最後の章で、彼は己れの生き方を古來著名な隱者たちのそれと對比しながら次のように論じている。

「若しくは乃わち莊周は漆園に偃蹇し、老萊は林窟に婆娑し、嚴平は塵肆に澄漠し、梅眞は市卒に隱淪し、梁生は吟嘯して跡を矯げ、焦光は混沌として槁朮し、阮公は昏酣して傲を賣り、翟叟は形を遯して以て倏忽たり。吾は韻を數賢に幾くする能わず、故に寂然として此の員策と智骨を玩ぶなり。」

郭璞は莊周、老萊子をはじめとする隱者に敬慕の念を抱

きつつも、自らが彼らのごとく行動できぬことを辯ずるのである。因みに遊仙詩第一首には「漆園に傲吏有り、萊氏に逸妻有り」の句があつて、漆園の吏に甘んじた莊周、楚王の招請を肯んぜず山林に隱れた老萊子の二人の先哲に、己れのとどるべき理想の道程を見出していることを思い合わせるがよい。隱遁およびそれにつながる仙化を志向しながら、一方においてその可能性に否定的であるとすれば、明らかにこれは一つの矛盾である。この矛盾はいつたい何を意味するのであろうか。

郭璞は靈異に通ずる不思議な才能をもち、それは山海經等の注釋あるいは江賦の描寫に充分に發揮されたのであつたが、彼はまたそうした異端の道を極めた人として、誰よりも旺盛な興味を遊仙に見出し得たのである。しかし彼の同じ才能はまた占筮者、豫言者として縦横に手腕を揮わせ、一寒門の士に過ぎぬ彼はその才を認められて大官の驥尾に付し、朝廷にも重用された。彼が晩年不臣の志を抱く王敦に招聘されてその記室參軍となつたのも、全く占筮の才幹を買われてのことであつた。彼が生涯公吏たるを免れぬ己

れの運命を渡江前すでに豫言していた(第二章参照)のは、  
こうした特殊な才幹が彼に一應の社會的地位を約束する半  
面、彼の人生がそれによつて大きな制約を受けねばならぬ  
ことを知覺したからであらう。かく、靈異に通ずる彼の才  
能は一方において彼の心を強く隱逸と仙化に導き、他方に  
おいてはその理想に趣くべき人生の自由な選擇權を自ら斷  
ち切る役割を果していた。ここに遊仙詩の矛盾が生ずる一  
つの契機があるとみるべきではあるまいか。

郭璞はまたそのように自己の人生を分裂に引き入れる恐  
れすらある才能を、敢えて一つの方向に統一して活用する  
ことを願わず、常にあらゆる方向で彼の生命が充足される  
ことを求めた人のようである。彼はかなり放漫な生活を送  
つた人であるらしく、あるとき友人の干寶が嗜酒好色の度  
の過ぎることを誡めると、彼は答えて言つた。「吾の受くる  
所は本限有り、之を用いて恆に盡くすを得ざらんことを恐  
る。卿は乃わち酒色の患を爲すを憂うるか」と。(晉書郭璞傳)  
己れに賦與された限りある人生は、とにかく最大限有効に  
その可能性を追求しなければならぬ。自分が日夜腐心する

詩人としての郭璞(興膳)

のはまさにそのことであつて、酒色の害など問題ではない  
といふのである。享樂主義者として放埒な處世を求めるの  
も、快樂という一つの方向を極めるためにほかならぬ。自  
らの特異な才能についても、彼はそれを活かす可能性をど  
こまでも擴張しようとする。生涯宮仕えを止めなかつたの  
は、自己の才能のために一つの活用の場を設けていたとい  
えようし、それはある場合には同一の才能が追求する仙化  
の理想を犠牲に供することによつて購われ得たのだつた。  
郭璞に行動の哲學があつたとすれば、以上のような要素を  
缺かせぬはずであり、それはついに彼をして隱遁者という  
アウトサイダーたらしめなかつた有力な原因となつたので  
ある。こうした彼とは對照的に、嵇康が身を野生の禽鹿に  
なぞらえ、つながれて嘉肴に飽く仕官の道を峻拒したのは、  
曠達の處世を守りぬくために、當塗の場での可能性を自ら  
斷ち切つたものといえる。客傲の一節で「昏酣して傲を賣」  
つた阮籍の處生に自らを方向づけ得ないというのも、以上  
のような郭璞の人間性に照してみれば全く當然のことであ  
らう。

郭璞における理想と行動の龜裂をもつとも生々しく描くのは第四首の詩である。これは遊仙の讚美どころか、全くの絶望の詩なのである。

六龍安可頓 六龍 安んぞ頓むべけんや

運流有代謝 運流 代謝有り

時變感人思 時の變ずるは人の思いを感ぜしめ

已秋復願夏 已に秋となれば復た夏を願う

淮海變微禽 淮海に微禽は變ずるに

吾生獨不化 吾が生は獨り化せず

雖欲騰丹谿 丹谿に騰らんと欲すと雖も

雲螭非我駕 雲螭は我が駕に非ず

愧無魯陽德 愧ずらくは 魯陽の徳の

廻日向三舍 日を廻らして三舍に向わしむる無きを

臨川哀年邁 川に臨んで年の邁くを哀しむ

撫心獨悲吒 心を撫して獨り悲吒す

際限なく循環をくり返す月日の上で、人の生命もまた推移して止まない。古詩に「人生は忽として寄するが如く、壽は金石の固きなし」という人生短促の歎きは、おそらく

詩の歴史の誕生以來くり返されてきた主題であろう。第七首ではまた「晦朔は循環するが如く、月盈つれば已に魄を見る」、第十三首では「靜歎して亦た何をか念わん、此の妙齡の逝くを悲しむ。世に在るは千月も無く、命は秋葉の蒂の如し」と同様に時間の推移と人生の短促への悲しみが語られている。その悲しみの對極として設定されるのは永遠の命を保證する仙化であり、彼は眞摯にその理想を希求する。しかし結局己が身は海に入つて蛤と變ずる雀にすらも及ばず、暮れなんとする太陽を呼びもどした魯陽の徳などあろうはずはない。ただ空しく手を拱いて歲月の奔流に身を委ねるほかはないのだ。

「淮海變微禽」の句は李善が指摘するように、國語に見える話を出處とするのであろうが、郭璞は爾雅圖贊の蚌の部でまた次のように變形の理を語る。「萬物の變蛻するは、其の理方び無し。雀雉の化するや、珠を含み璫を懷く。月と與に盈ち虧け、氣を晦望に協す。」すなわち變蛻はならびなき靈妙な自然の理とされるのである。こうした意味をもつ變形譚は抱朴子にもしばしば現われるが、それは常に

仙化の可能性を説く論證あるいは鍊金の可能性の論證としての役割を帯びている。論仙篇では等しく萬物の靈長たる人間の間に賢愚邪正等の異がおのずと存するように、凡人と死を同じうせぬ仙人の存在を説きあかすべく、次のような論述を展開している。

「若し氣を受くる者は皆一定なるもの有り」と謂わば、雉の蜃と爲り、雀の蛤と爲り、壤蟲の翼を假り、川蛙の翻飛し、水蟻の蛉と爲り、荇苓の蛆と爲り、田鼠の鴛と爲り、腐草の螢と爲り、暹の虎と爲り、蛇の龍と爲るは皆然らざるか。若し人は正性を受けて凡物に同じからず、皇天の命を賦して彼此無しと謂わば、牛哀の虎と爲り、楚姬の龍と爲り、枝离の柳と爲り、秦女の石と爲り、死して更に生まれ、男女の形を變え、老彭の壽く、殤子の夭せしは、其れ何の故ぞや。苟しくも同じからざるもの有れば、其の異なるもの何の限りあらんや。」

想像するに「雀海に入つて蛤と爲る」の類の異種變形譚は、恐らく當時の神仙家たちの間で仙化のアナロジイとして考えられていたのではないだろうか。やや趣きは異なる

詩人としての郭璞（興膳）

が、中世ヨーロッパの鍊金術が暗示的な寓意の繪によつて秘理の過程を示したことを思い較べてみるのもよいかもれない。「淮海變微禽」の句も單なる思いつきの譬喩ではなく、地上における仙化の可能性を強く提示する隱喩なのであり、その可能性が信じられていればこそ、「吾生獨不化」の歎きは深い絶望の響きを伴わずにはおかない。

不滅の人生、あるいは遊仙の可能性について疑惑し絶望の吐息を洩らした詩人は古來少なくない。古くは古詩十九首の詩人が「服食して神仙を求むるに、多く藥の誤る所と爲る」（其十三）、「仙人王子喬は、與に期を等しうし難し」（其十五）と神仙の得難さを嘆じている。詩人が絶望の補償として追求したのは現世での快樂であり、「如かず美酒を飲み、純素を被服せんには」（其十三）、「樂しみを爲すは當に時に及ぶべし、何ぞ能く來る茲を待たんや」（其十五）と短い人生のせめてもの充實がうたわれるのである。また阮籍の詠懷詩もしばしば神仙への絶望をもらす。「昔神仙の土有り、乃わち射山の阿に處る」には、じまる其七十八は、續いて「聞くべくして見るべからず、慷慨して嘆し

咨嗟す。自ら儔類に非ざるを傷み、愁苦來つて相い加わる」と仙化の可能性を自ら否定し去る。其五十五に「人は延年を願うを言うも、延年して焉いずかにか之かかんと欲する。

黄鵠は子安を呼べども、千秋未だ期すべからず」とあるのも絶望の方向は同じである。だが阮籍はもはや一時の快樂に身を没することによつて絶望を癒やそうとする態度ではない。老莊的哲學者たる彼は、大人先生傳、達莊論に見るごとき形而上の世界での暢達によつて人生の苦悶を開放するのである。また阮籍においては、自らの仙化の實現よりは、精神の自由な擴充の場としての神仙界により多くの關心が注がれていたことを忘れてはならぬ。

神仙の存在を信じ、自らその實現を目ざしたという點で、嵇康はもつとも郭璞に近い詩人である。詩の中で彼はしばしば仙界目ざして天翔ける鸞鳥のイメージに託して仙化への憧憬を描くが、しかしそれは惡意に満ちた世俗からの脱出という切なる願いを孕みつつも、隱棲を通しての仙化という現實性はなお稀薄であり、脱俗の形而上の世界に高踏せんとする觀念性を拂拭しきれぬものであつた。また彼の

超脱の志は終始一貫しており、郭璞におけるごとき逡巡を見せない。彼は己れの志を挽めようとする世俗の惡意を、鳥の高翔をはばむ網羅のイメージに形象しはするが、飛鳥は更なる高みに自由を求めて翔つてゆく。<sup>16)</sup>

郭璞は古詩十九首の詩人のように神仙を得ぬ悲しみを快樂によつて消し去らうとはしない。また彼は阮籍や嵇康のような形而上的意義を遊仙に託することもなかつた。彼は神仙家の常識として、隱棲を階梯とする仙化の可能性を人間一般の命題として信じたのである。だがそれを彼自身の理想として追求しようとするとき、可能性は潰つぶえ去り、彼は敗北を認めなければならぬ。「川に臨んで年の邁まくを哀しみ、心を撫でて獨り悲吒す」——ここに認められるのは理想の失墜を前にただ悲嘆する以外に術を知らぬ人の姿である。隱遁と仙化を求めながら空しく歲月の推移を見送らねばならぬ嘆息の裏には、晩年叛逆者王敦に仕えて身の危険を豫感しながら、なおも公吏たるを免れぬ自己への絶望が二重映しとなつて潛んでいるように思われる。

同じく絶望の詩でも、第五首においては、仙化を信じよ

うとしない世間に對する幻滅がうたわれている。

逸翮思拂霄 逸翮 霄を拂わんと思ひ

迅足羨遠遊 迅足 遠遊を羨む

清源無増瀾 清源は瀾を増す無ければ

安得運吞舟 安んぞ吞舟を運らすを得ん

珪璋雖特達 珪璋は特達すと雖も

明月難闇投 明月のたまは闇に投じ難し

潛穎怨青陽 潛穎 青陽を怨み

陵苔哀素秋 陵苔 素秋を哀しむ

悲來惻丹心 悲しみ來つて丹心を惻ましめ

零淚緣纓流 零淚 纓に緣つて流る

清らかな瀨が吞舟の魚を寄せつけぬように、神仙を虚妄として信じぬ世人。明玉にも譬うべき仙化の理も、常識の殻の中に頑なに閉じこもる衆人には、ただいたずらに怪異を増すだけのものではないのだ。「清源」以下の四句は李善の注に従えば以上のように解釋できる。怪異なるものの認識に關する世人への抗議は夙に山海經序で見た通りであるが、仙化の理をめぐる世人の無理解は、また抱朴子葛

詩人としての郭璞（興膳）

洪のしばしば嘆ずるところでもある。「而るに淺識の徒は俗に拘み常を守つて、咸世間に仙人を見ずと曰い、便わち天下に必らず此の事無しと云う。夫れ目の曾て見し所は、當に何ぞ言うに足るべけんや。（中略）其の短淺の耳目に仗つて、以て微妙の有無を斷ずるは、豈に悲しまざらんや。」

（論仙篇）然り而うして淺見の徒は守る所に區區とし、茶蓼を甘しとして糝蜜を識らず、醕酪に酣して醇醪を賞せず。

生を好むを知るも養生の道有るを知らず、死を畏るるを知るも不死の法有るを知らず。（中略）余は神仙の得べきを言うといえども、安んぞ能く其れをして信ぜしめんや。（微旨篇）

しかし郭璞は聲を大にしてどこまでも世人の無知を非難するわけではないし、また無理解な世間を黙殺して心を玄遠の域に遊ばせようと達觀するわけでもない。ここでも彼はただ絶望に身を委ねるほかになす術を知らないのである。「悲しみ來つて丹心を惻ましめ、零淚は纓に緣つて流る」——かくて涙はしとどに冠の紐をぬらす。

だが郭璞が憤り、悲しみ、そして絶望するのは、決して

神仙を理解せぬ世間の無知の故のみではなからう。「逸翮」  
 「迅足」の二句を己れの秀でた資質に對する秘かな自負を  
 表現するものとして解釋すれば、一首の趣きは自己の能力  
 を充分に活かすことのできぬ社會への絶望ともなり得る。

「吞舟」を受けつけぬ「清源」に譬えられる俗世、「珪璋」  
 「明月」を不氣味なものとして敬遠する狭量な世人は、彼  
 の才能を眞に活用してはくれないのである。かく詩の屈折  
 に富む表現は、おのずからに不遇の士の牢騷を色濃く滲ま  
 せている。卜筮の術に没頭する彼に投げかけられた縮紳の  
 士の嘲笑と、高才を恃みながら卑位に居る自尊心の責め苦  
 に對して、彼は自嘲の文章「客傲」を著わしてわずかに心  
 意を慰めたのであつた。陳祚明がこの一首について、「情  
 は辭に見みわる。時に才を展ひばすに足らざるを傷み、世に出  
 ずることの早あからざるを悔まゆ」と評するのは、この詩に託  
 された心情の一面を正しく言い當てた評價といえよう。<sup>⑧</sup>

凡そ詩の鑑賞に際して、その内容をあまりに詩人の實  
 人生と關連づけて説いては、附會の道に迷いこむ恐れが  
 ありう。ポール・ヴェルレーヌの「秋の歌」(La chanson

d'automne)が、彼の「高踏派の詩人としてもつとも幸福  
 なる時代」に書かれ、「過ぎし日の事思い出でて泣く」「わ  
 れは此處彼處にさまよう落葉」という悲嘆の句が詩人の  
 jeux d'esprit (心の遊戲)にすぎぬことを、永井荷風は詩  
 人の傳記から教えられた由である。(「夏の町」、荷風はおそ  
 らくヴェルレーヌの友人ルベルチェの説によつたのだらう。)しか  
 し郭璞にとつて遊仙はとうてい心の遊戲どころではあり得  
 なかつた。彼の場合は隱遁と仙化の志が彼の思考全體、人  
 生全體を覆う巨大な存在であり、やがてその志向の根強さ  
 が彼の人生に埋め得ぬ深い龜裂を生むに至つたことこそが  
 むしろ問題とされなければならぬ。

### 七 結び——郭璞の死——

靈異に通ずる郭璞の特異な才能は、官界の人としての境  
 涯において發揮されることによつて、彼を占筮者の花形た  
 らしめた反面、生涯の悲願であつた遊仙の志をついに至り  
 得ぬ一場の夢幻と變ぜしめた。しかも占筮者としての才腕  
 がいかに貴顯の間で尊重され重寶がられたとはいつても、

それは所詮一藝に秀でた賤業の徒として遇されたに過ぎないのであり、官界での榮達という實を伴わぬ虚名をただいたずらに輝やかせたまでなのであつた。寒門の土にとつてはあまりにも厚すぎる門閥制度の壁と彼は厭應なしに對決させられ、苦い劣等感に絶えずさいなまれ續けたにちがいない。「子は固より高き楚、我は伊れ羅なれる葛」(答賈九州愁詩)、「子は騏駿に策ち、我は駘轡を案う」(贈温驍)、「我は薄を同じうすと雖も、爾と穎を異にす」(答王門子)——己れの身分に關する劣等感に常に重苦しく彼の意識を抑えつけていた。しかし彼には己れが官界の人として生き生き得ぬという諦觀がある以上、あくまでも社會の此岸で生命を充實すべく、あらゆるチャンスに働らきかける絶望的な努力が必要であつた。彼はなおも卜筮の術を棹として巧みに爲政者たちの間を漕ぎまわる。彼の名聲は日とともにいつそうひろがつてゆく。だがそれは依然としてあの占筮者としての名聲以外の何物でもなかつたのだ。このときさらに彼が認識を迫られたのは、隱遁と仙化の素志を遂げえず、碌々として現世の絆にすがりつく卑しむべき己れの

詩人としての郭璞(興膳)

姿ではなかつただろうか。自己の處世を見つめる眼はいきおい自虐性を帯びざるを得ない。

郭璞には虻蜂の賦という變つた作品がある。(藝文類聚卷九十七、太平御覽卷九百四十七等引)題材として風變りであることのほかに、この蟲の微賤な屬性に關心の注がれていることがいつそう奇異な感じを誘う。

「惟れ洪陶の萬殊なる、羣形を賦して遍く瀟く。物は昆蟲より微さきは莫く、屬は螻蟻より賤しきは莫し。淫淫突突として、交錯往來し、行くに迹を遺す無く、驚すに埃を動かさず。迅雷震うも駭かず、激風發するも動かさず。虎賁比ぶも懼れず、龍劍揮うも恐れず。」

蚌や蟬が仙化の理を象徴する神秘的な生物として考えられるのとは對照的に、虻蜂は徹底して愚かな蟲としてとらえられており、爾雅圖贊にはまた「虻蜂の瑣劣なる、蟲の不才なり」との句が見えている。(太平御覽卷九百四十七引)この蟲の愚かしさといつたら、迅雷激風の恐ろしさすら理解しえないというありさまなのだ、しかしまさにそうした愚かしさゆえにこそ、彼は地上の萬物おしなべてひれ伏さ

ざるはない恐怖の前に平然として臨むことができるのである。

郭璞の意識の中で、自虐の鑿のびが次々と處世の據り所を削り去つていつたあと、最後に至り着くのは大愚として自らをおとしめる境地である。蚺蜥が愚かな性質のために反つて安然自若として生を保つように、彼自身も大愚の境地に沈潜することによつてはじめて生のジレンマから自らを解放することができるのではないか。自己の *top* たることを意識に徹して、しかもみごとに *top* になりきつてみせる——人生の危機を回避する唯一の道がここには暗示されている。蚺蜥の賦をそのまま郭璞の自叙と思ひこむのはもちろん輕率に過ぎよう。しかしこの微賤愚昧の昆蟲に寄せられた詩人の異常な關心には、やはり彼の人生からの投影を何らかの程度に認める必要があるようだ。彼は蟲の生態を描きながら、まぎれもない彼自身の生き方をそこから考へずにはいられなかつたであらう。賦は先の引用のあとなお數句の敘述を経て、最後にもう一度この蟲の特色ある生態を描いて結ばれる。「萌せる陽ひに感じて潛ひそかに出で、將まさ

に雨ならんとするを知つて穴を封とす。伊いれ斯の蟲の愚昧なる、乃すなはち先んじ識しつて恠てに似たり。」蚺蜥は知力によらず、全身の感覺によつて外界の變化を豫感し、毫も變化にさからうことなく身を順應させる。自尊心を振り捨てて占筮の術に没頭すべき己れには、これこそ處世の要諦を示唆する生き方ではないのか。

では郭璞はよく大愚の境地に身を沈め得ただろうか。晉書の傳による限り、彼はやはり一生さかしらを捨てることなく終つたようである。彼は晩年卜筮の術を買われて大將軍王敦の記室參軍となつた。東晉の王室に對して不臣の心を露わにする王敦は、多くの名士を配下に召しかかえるべく努めたようであり、彼の意圖を知る名士たちは、あるものは病いを口實に出仕せず、あるものは強大な權勢の前に止むなく節を屈した。王敦の亂が平定された直後に書かれた溫嶠の上書は、名士たちのために次のような辯明を試みている。

「且つ敦の大逆を爲すの日、人士を拘録し、自ら免るるに路無し。其の私心を原もとぬれば、豈いかに晏やすく處るに違ちがあらん

や。陸玩、羊曼、劉胤、蔡謨、郭璞の如きは常に臣（嶠）  
と言う。（ゆえに）備さ<sup>そな</sup>に之を知る。」（晉書溫嶠傳）

郭璞に對しても恐らく權勢を恃んでの有無をいわせぬ強  
引な任命だつたのであろう。しかしまた晉中興書（太平御  
覽卷二百四十九引）はこのときの郭璞の進退を記している。

「王敦は璞の術有るを以て、取つて參軍と爲す。璞敢て辭  
せず」と。王敦の逆志を見抜いていたはずの彼が何の抵抗  
もなく要請を受け入れたとすれば、王敦の成功に賭ける打  
算づくの意圖が全くなかつたとはいきれぬであらう。晉  
書はこのころ郭璞がすでに王敦の敗北と彼自身の死を豫見  
していたとする説話をいくつか記載している。その一つ  
「——大將軍掾として王敦に重んじられた陳述が死んだと  
き、郭璞は痛く慟哭して死者に呼びかけた。『嗣祖（陳述  
の字）よ、嗣祖よ、君は幸せだつたかも知れないよ。』王敦  
が兵を擧げたのはそれから間もなく後であつた。」なるほ  
ど彼が參軍として將軍に近侍するようになった後に、この  
ような豫見を得ることはあり得たかもしれない。だが王導、  
溫嶠、庾亮といつた朝廷側の重臣と密接な交渉を有してい

詩人としての郭璞（興膳）

た郭璞が、敵方の王敦に不首尾を見通しながら進んで荷擔  
するなどということがいつたいあり得るだらうか。このと  
きの彼の行動の動機は全くの謎の中に葬られてしまつた。  
しかしあのいかにも機に乗ずることの巧みな性癖がついに  
行動を規制したと想像する餘地はなお残されているように  
思われる。晉書は郭璞の最後としてはなほた印象的な説話  
を記している。

「敦まさに兵を擧げんとし、又璞をして筮せしむ。璞曰  
く、『成る無し』と。敦は固より璞の（溫）嶠（庾）亮に  
勸むるを疑いしに、又卦の凶なることを聞き、乃ち璞に  
問いて曰く、『卿更に吾が壽の幾何なるかを筮せ』と。答  
えて曰く、『向の卦を思うに、明公事を起さば、必らずや  
禍いの久しからざらん。若し武昌に住まらば、壽測るべか  
らず』と。敦大いに怒つて曰く、『卿の壽は幾何ぞ』と。  
曰く、『命は今日の中に盡きん』と。敦怒つて璞を收め、  
南岡に詣つて之を斬る。』

いささか面白すぎる話ではあるが、假りにこれを事實と  
すれば、郭璞は自らの死を卜するという行爲の中で、生涯に

はじめて徹底した<sup>3)</sup>に身を落しきつてみせたのであつた。郭璞の人生での選擇權は逆賊王敦の配下としての道を選んだときすでに盡きていた。王敦に與した後の彼がいかに主人の失敗を豫知しようと、それは畢竟彼自身の蹉跌を知つたにほかならないのだ。自らに死の斷罪を下したときの彼は、恐らく人生でもつとも正直な心境にいたに相違ない。

仙化を願つた郭璞はかくして非命に死んだ。神仙傳（太平廣記卷十三引）の傳える説話によれば、郭璞の肉體は死後間もなく消失して仙化し、水仙伯となつたという。天仙、地仙に次ぐ解仙の地位を、彼は死後ようやく説話の中で得たのであつた。

注

- ① 初元（帝）明（帝）世、郭璞爲讖曰、「君非無嗣、兄弟代禪」。謂成帝有子而以國祚傳弟。又曰、「有人姓李、兒專征戰、譬如車軸脫在一面。兒者子也。李去子木存、車去軸爲互、合成桓字也。又曰、「爾來爾來、河內大縣」。爾來謂自爾已來、爲元始、溫字元子也。故河內大縣溫也。成（帝）康（帝）既崩、桓氏始大、故連言之。又曰、「頼子之喪、延我國祚。痛子之隕、皇運其暮」。二子者元子道子也。溫志在篡奪、事未成而死、幸之也。會稽王道子雖首亂晉國、而其死亦晉衰之由也。故云痛

也。（晉書桓溫傳）

始元帝以丁丑歲（三一七）稱晉主、置宗廟、使郭璞筮之。云、「享二百年」。自丁丑至禪代之歲、年在庚申（四二〇）、爲一百四歲。然丁丑始係西晉、庚申終入宋年、所餘一百有二歲耳。璞蓋以百二之期促、故婉而倒之、爲二百也。（晉書恭帝紀）

- ② 干寶の語の見える話は晉書五行志中に數多いが、いまその一つを引いて例としよう。

元帝大興中、王敦鎮武昌。武昌炎火起、輿衆救之、救於此而發於彼、東西南北數十處俱應、數日不絕。舊說所謂濫災妄起、雖與師衆、不能救之之謂也。干寶以爲此臣而君行、亢陽失節、是爲王敦陵上、有無君之心、故災也。

こうした類の話にはそのまま現在の搜神記に見えるものがかなり存するが、いま傳わる搜神記のテキストは干寶の原著ではなく、明代にできたものなので、これだけで輕率に五行志との關係を云々することはできない。私が本文で問題にする搜神記とは、あくまで干寶著の原搜神記であることをこゝわつておく。

- ③ 初導渡淮、使郭璞筮之、筮成、璞曰、「吉無不利、淮水絕、王氏滅、其後子孫繁衍」、竟如璞言。（晉書王導傳附子奮傳）
- ④ 撫軍問孫興公、「劉眞長何如」。曰、「清蔚簡令」。「王仲祖何如」。曰、「溫潤恬和」。「桓溫何如」。曰、「高爽邁出」。「謝仁祖何如」。曰、「清易令達」。「阮思曠何如」。曰、「弘潤通長」。「袁羊何如」。曰、「洮洮清便」。「殷洪遠何如」。曰、「遠有致思」。「卿自謂何如」。曰、「下官才能所經、悉不如諸賢。至於

斟酌時宜、籠罩當世、亦多所不及。然以不才、時復託懷玄勝、遠詠老莊、蕭條高寄、不與時務經懷、自謂此心無所與讓也。(世說新語品藻篇)

⑤ 次の逸話は人々の北方の土地に對する郷愁を物語つてゐる。

過江諸人、每至美日、輒相邀新亭、藉卉飲宴。周侯中坐而歎曰、「風景不殊、正自有山河之異」、皆相視流淚。唯王丞相(王導)愀然變色曰、「當共戮力王室、克復神州、何至作楚囚相對」。

(世說新語言語篇)

⑥ 景純勸處仲(王敦の字)以勿反、知壽命之不长、游仙之作、始是時乎。青谿之地、正在荊州、斯明證也。(詩比興箋卷三)

⑦ 「兼」はふつう「無」の字になつてゐるが、「辭に俗累無し」では前後の論旨とうまくかみあわなないように思われるので、ここでは梁章鉅の文選旁證ならびに胡克家の文選考異の説に従つて改めた。

⑧ ○鄒潤甫遊仙詩 潛穎隱九泉、女蘿緣高松(文選卷二十一郭璞遊仙詩注引)

○王彪之遊仙詩 遠遊絕塵霧、輕舉觀滄溟、蓬萊陰倒景、崑崙罩曾城、(文選卷二十二謝靈運從游京口北固應詔詩注引)

⑨ 解放後の文學史が郭璞の遊仙詩にかなりの評價を與えながらも、消極的頹廢的情緒として批判するのは、まさにこうした列仙の趣きの存するためである。

沈德潛在《古詩源》裏說他的《游仙詩》本有托而言、坎壈詠懷、其本旨也。雖不全如此、但有幾首的確是寄托、詠懷之

詩人としての郭璞(興膳)

作。(中略)但必須看到、《游仙詩》主要是寫爲遠禍、延齡而幻想去優游玄虛縹緲的神仙世界、以及這種理想不得實現的悲哀。因此、總的看來、其中雖有一定現實意義、而消極因素却是十分嚴重的。(北京大學中文系學生編著「中國文學史」(修訂本)、北京人民文學出版社一九六〇)

⑩ 有員丘山、山有不死樹、食之乃壽。亦有赤泉、飲之不老。(海外南經不死民條郭注)

⑪ 吾令豐隆乘雲兮、求宓妃之所在、解佩纕以結言兮、吾令蹇脩以爲理。(楚辭離騷)

⑫ 陳祚明が蹇脩を隱遁のてだてとする解釋に私の考えは近い。

蹇脩恐亦是寓言、所以翹述洗耳之故、未爲眞解。何也、苟作眞解、當不云時不存。(采叔堂古詩選卷十二)

⑬ 趙簡子嘆曰、雀入于海爲蛤、雉入于淮爲蜃、龜羅魚鼈、莫不能化、唯人不能、哀夫。(國語晉語)

⑭ 變形譚が鍊金と關連づけられている例を一つあげておこう。

夫芝菌者、自然而生、而仙經有以五石五木種芝、芝生取而服之、亦與自然芝無異、俱令人長生、此亦作金之類也。雉化爲蜃、雀化爲蛤、與自然者正同。(抱朴子黃白篇)

⑮ 嵇康の詩における遊仙の思想については、拙稿「嵇康の飛翔」(中國文學報第十六册所收)ですでに考察した。

⑯ 陳沆の解釋もこれに近い。吞舟非淺瀾可運、奇才非卑位可展、仍然前章之旨也。不然、輕舉自由、遺情任物、有何暗投之按劍、有何陵吾之怨哀、有何纓淚可流、丹心可惻。(詩比興箋卷二)